

「臨死体験が
教えてくれた
宇宙の仕組み」



木内 鶴彦

(セカンドステージ)

Tsuruhiko Kiuchi

「臨死体験」が
教えてくれた
宇宙の仕組み



木内鶴彦
(セカンドステージ)
Tsuruhiko Kiuchi

晋遊舎

はじめに——いま、新たな旅立ちのときを迎えて

私はアマチュアの彗星^{コメット・ハンター}搜索家です。宇宙を観察して新しい彗星を発見し、世界に発表しています。

新しい星には見つけた人の名前がつけられます。私は二度も新しい彗星を見つけ、自分の名前をつけることができました。また長年行方不明になっていた有名な彗星を再発見し、その功績を認められて、小惑星に「K I U C H I」の名前がつけられました。私の彗星搜索家人生はたいへん幸運だったと思います。

その一方で、私の体は二十代のとき、死亡するという特異な状態に置かれたことがあります。心肺停止、脳波もなくなり、医学的には死亡した状態で、私は驚くべき臨死体験を経験しました。そのとき見たもの、感じたことのすべてを、私は数十年たつたいまでも鮮明に記憶しています。

これまでの長い時間、私はつねに、「なぜ、私はあのとき死なずに、ここに戻らなけれ

ばならなかったのか」「なぜ、私だったのか……？」という思いにとらわれてきました。そしてその答えを求める旅は、おそらく一生続くのでは……とも思っていたわけです。しかし、ある出逢いにより、その答えを求める旅は終わり、新たに自分がなぜその経験をしなければならなかったのか……、私の役割……、使命に目を向け、一步を踏み出すときが来たことを悟りました。

いままで私は一人でした。たった一人で答えを探し求める孤独な道を歩んできました。そしてその旅を終え、パートナーとともに役割を果たす本当の旅にいま、よくやく出発します。

私はこの人生の中で私らしく生きたいと思っています。私らしさ……。私の人生は死ぬことでしか行けない旅をしたこと、その旅で見たもの、感じたことを正直にお話すること、私の経験を必要としてくださる方々の元へ行き、お伝えすること。この在り方が私が私、木内鶴彦なのです。

この地球もいつかは星としての生命を終えるときが来るでしょう。そのときまで、私たち地球上で生きるすべての生命が、その存在理由である生態系を維持すること、その

ためのメッセージをこの本でお話したいと思います。

なお、この本の中で登場する歴史認識や科学などに関する内容は、あくまでも私が臨死体験をしたときに見たり、感じたりした事柄に基づくものであり、その確証は定かではないことをお断りしておきます。

二〇一四年 天秤座が美しく輝く季節に

木内鶴彦（セカンドステージ）

「臨死体験」が教えてくれた宇宙の仕組み——目次

はじめに——いま、新たな旅立ちのときを迎えて 3

第一章あの世はどうなっているのか——最初の臨死体験

宇宙と向き合えば向き合うほど、よみがえる不思議な体験 14

助かった人がいない重篤な腸閉塞で死の淵に 18

トンネル、花畑、亡くなった人たち…… 20

肉体を離れた「意識」に「自分」がある 26

幼い自分に声をかけたのは誰だったのか？ 32

未来に行って見てきた映像は現実に起こった！ 35

友人の意識に入り込み、試してみたこと 40

歌集に残した「つる」の文字 45

珍しい症例として学会でも報告される 48

第一次臨死体験と第二次臨死体験がある 52

第二章あの世はどうなっているのか——二度目の臨死体験

宇宙が私に生き方を示してくれた 60

皆既日食の瞬間だけ雲が晴れる奇跡 63

心肺停止で運び込まれ、ふたたび臨死状態に 69

過去に戻って北斗七星を岩に刻む 73

中国語で話しかける医師に通訳なしで返答する 76

第三章「膨大な意識体」と宇宙が生まれたわけ

あの世は五次元でできている 82

「膨大な意識体」で共有されるとつもない情報 85

宇宙は「膨大な意識体」のひずみから生まれた 88

死は意識が形を変えるだけのこと。恐れることではない 90

輪廻転生や前世の記憶はひずみによってもたらされる 93

第四章 宇宙の誕生で見えてきた世界

惑星は太陽が収縮するたびに産み落とされた塊だった 100

電子のスパークがアミノ酸を生命に変える 103

原始の地球では放射線をえさとする生命があった 106

意識はミトコンドリアの中に存在する 110

一万五〇〇〇年前まで地球に月はなかった 114

月を見ると、すべての生物は不安になる 118

人間は自らテレパシーの回線を遮断した 121

私たちはもうすでに未来に行っている！ 123

自分を「気配」に変えると第六感が覚醒する 126

第五章 私たちの使命とは何か

私たちはゲームの中に生きるキャラクター 132

人間が一番新参者であるわけは…… 135

人間は過去三度、文明崩壊の危機に瀕している	138
未確認飛行物体（UFO）は本当にあるのか？	141
宇宙のかなたにある謎の宇宙ステーションを発見？	145
肥沃な土地が砂漠になり、二度目の破滅が訪れる	149
三度目の破滅で滅んだエジプト文明	152
循環型のサイクルを守るのが人間の役割	154
かつて人間は循環型の社会をつくっていた	159
世の中にいない人など一人もいない	162
自分の役割を見つける近道と一人一品持ち寄りシステム	165
新しい村づくりの構想とは……	167

第六章 未来へ。新たによみがえる臨死体験の記憶

「最良の未来」と「最悪の未来」、どちらを選択するのか	174
波動を使う未来の医療	177
昔の人はすでに波動医療を行っていた！？	182
彗星が地球にぶつかる日	185
宇宙ステーションは彗星の軌道をずらすためのもの	189
新たによみがえる臨死体験の記憶	192
おわりに——四度目の破滅は避けられるのか	196

装幀 重原隆
編集協力 辻由美子
カバー写真 Oversnap / iStockphoto
本文写真 木内鶴彦

第一章

あの世はどうなっているのか ～最初の臨死体験～

○ 宇宙と向き合えば向き合うほど、 よみがえる不思議な体験

私は幼い頃から科学が大好きでした。小学生で星の観測を始めたのも、宇宙や科学に関心があったからです。大人になってから航空自衛隊に入隊したのも、空に関わる仕事に就いて宇宙に行きたいという夢があったからです。

そんな私の人生を一八〇度変えることになったのは、二二歳のとき経験した臨死体験です。

でもその体験があまりに不思議で、それまでの常識では考えられないことでしたので、私は長くその経験を人に語ることはありませんでした。

だからこそ私は長く沈黙を守り、自分の体験を胸に秘めてきました。でも年月が経てば経つほど、自分が見てきた不思議な世界の存在をどうしても打ち消すことができなくなってきたのです。

その後、私は天文学の世界に深入りし、独学で天体観測を学びました。三五歳のとき、

初めて「チェルニス・木内・中村彗星」を発見。三六歳で「土屋・木内彗星」を見つかるなど、二度にわたって新しい彗星を発見し、「彗星搜索家」としてこの世界で少々名が知られる存在になりました。

「彗星搜索家」とは新しい彗星を発見することを生きがい、宇宙を観察し続けている人のことをいいます。

彗星を見つけたからといって、賞金が出るわけでも、なんらかの地位が与えられるわけでもありませんが、最初に見つけた人の特権として、彗星に自分の名前をつけることが許されます。

私が最初に見つけた「チェルニス・木内・中村彗星」は、リトアニアに住むチェルニスさんと三重県に住む中村さんと私がほぼ近い時間帯に発見したものです。

また「土屋・木内彗星」は土屋さんと私がほぼ同時期に見つけたために、この名前になっています。

世界中に何万人という「彗星搜索家」はただひたすら新しい彗星を発見し、自分の名前が彗星につけられて、永遠に残るといふ喜びのために、宇宙に目をこらし続けているのです。

「はじめに」でお話ししたように、私は三九歳のとき、「スウィフト・タットル彗星」を再発見、小惑星に「K I U C H I」と命名される機会もいただきました。

自分の名前がついた彗星や小惑星が存在する！ アマチュア天文家にとってはこれ以上ない喜びです。

私はそこで満足すべきだったのかもしれませんが、でも広い宇宙と向き合えば向き合うほど、二二歳のときのあの不思議な臨死体験が鮮明によりみがえり、胸に秘めておくことができなくなりました。

私が死後の世界を体験し、ふたたび生き返ったのは、何か意味があったのではないか。私には何か使命が課せられているのではないか。私は少しずつ自分の臨死体験について話し始めるようになりました。

さらに背中を押してくれたのは、五五歳のとき、中国で二度目の臨死体験をしたことです。それが決定的となりました。

それまでも、私はかぎられた人たちに私の不思議な体験を話したことはありませんでしたが、二度にわたる臨死体験で膨大な知見を得ることができたのです。それを知らせる使命が自分にはあると確信しました。



たとえそのために天文学の世界で築いた実績や世間からの信用が失墜してもかまわない。あのガリレオですら、「地球は回っている」と唱えたとき、世界から嘲笑されたではありませんか。

常識では考えられない不思議なことを詳らかにしていかなければ、科学の進歩はありません。いまの科学が証明できないことも、未来では当たり前になっているかもしれない。そのために科学の挑戦があるのです。

私は私が見てきたこと、経験してきたことを、包み隠さず話していこうと決意しました。そしてそれを可能なかぎり、いまの社会で検証し、実現していくのが正しいあり方だと思うにいたったのです。

この本で私が見てきた世界とそれに対する見解を述べさせていただきます。常識では考えられないこともたくさんあります。「バカげている」と一笑に付す方もいらっしゃるかもしれませんが。

でもこれらは間違いなく私が実際に体験した事実なのです。そこに未来の科学につながる手があるかと私は信じています。

まずは私の人生を変えることになった臨死体験からお話しします。

● 助かった人がいない 重篤な腸閉塞で死の淵に

最初の臨死体験をしたのは私が二二歳のときでした。当時、私は航空自衛隊に勤務している自衛隊員でした。茨城県にある百里基地ひゃくりで航空管制官（ディスプレイャー）の任務に就いていたのです。

航空管制はひじょうに神経を使う仕事です。緊急のスクランブル発進にも対応しなければいけませんから、二四時間交代で勤務します。その日、私は夜間勤務を終え、管制塔から白々と明け始める朝焼けの美しい空を眺めていました。どこまでも続く空と向き合う時間は私にとって至福のひとつでした。

そのときです。突然、いままで経験したこともないような激痛が腹部を襲ったのです。脂汗がたらたら流れ、意識が遠のいていくのがわかりました。異変を察知した同僚たちがすぐさま救急車を手配し、私は近くの病院に緊急搬送されました。

その間も、私の腹部はみるみる膨れ上がり、七転八倒の痛みが襲います。痛みのため

に意識が戻り、また気を失うというくり返し。まさに地獄の苦しみでした。

「このままでは危ない。きちんとした検査ができるもっと大きな病院に転院したほうがいい」

搬送先の医師の判断で、私はふたたび救急車で土浦市にある東京医科大学阿見病院（現東京医科大学茨城医療センター）に転送されました。あとでわかったのですが、私の病気は腸閉塞、その中でも背骨と動脈の間に十二指腸がはさまって腸閉塞を起こす「上腸間膜動脈性十二指腸閉塞」というたいへん珍しい病気でした。世界でも症例は一二〇例ほど。助かった人は一人もいないというひじょうに重篤な病気です。

大学病院に着いたとき、私の胃はこれ以上ないくらいに膨れていました。病院ではすぐに胃の中に溜まったものを抜き取る処置が行われました。鼻から挿入された管で胃の内容物を抜き取ったのですが、なにしろ腸が詰まっているので、行き場を失った体液や胃液、胆汁、血液など内容物の量は半端ではありません。吸い出された量は五リットルほど。胃の容量は一・四リットルほどなので、幸いなことによく胃が破裂しなかったものだ、それは医師も驚いたほどの量でした。

胃の中のものを抜き取って、一時的に楽になった私ですが、今度は激しい脱水症状が

襲ってきました。胃からは挿入された管を通して、体液がどんどん抜き取られていきま
すし、腸は閉塞していて、栄養はおろか、水分さえ吸収できないのですから、急速に脱
水が進みます。前日まで七二キロあった体重が、翌日にはあつという間に四二キロまで
減ってしまうという極度の脱水が起きたのです。

心臓や腎臓、肝臓などあらゆる内臓の機能が一気に低下し、私は危険な状態に陥りま
した。手術どころか、検査をすることさえできません。そのまま私は生死の境を彷徨う
ことになったのです。

○ トンネル、花畑、亡くなった人たち……

私は病院のベッドの上で寝ていました。混濁する意識の中で、医者が「もってあと一
週間だろう」といつているのが聞こえます。「俺はあと一週間の命なのか」。なんともこ
らえようがない痛みと戦いながら、私はぼんやりそんなことを思っていました。

それでも私の父が必死に医者に「レントゲンの検査だけでもしてほしい」と頼み込ん

だのです。原因不明のまま、なすすべもなく死なせてしまうのは、親としてもしのびな
かったでしょう。弱り切った体に、鼻の管から造影剤が入れられました。しかしその
負担に体は耐えられませんでした。レントゲンの検査が終わる頃には、私は危篤状態に
陥っていました。

ちょうどシャッターが閉まるように、パタンと意識がなくなりました。そして気がつ
くと真っ暗闇の中にいました。私は自分がどこにいるのかわからず、周囲を見渡しまし
た。

すると、そのとき、遠くに光が見えてきました。私は光源を目指して這いずるよう
に動き出しました。不思議なことに、自分が這い回る感覚がはつきりと感じられます。

ちようど田んぼのぬかるみの中を這っているようなぬらぬらした感触です。泥をつか
むと、指の間からぬるっと泥が出ていくリアルな感覚がありました。

しばらく這って進んでいると外に出ました。振り返ると自分がいたのが洞窟のような
トンネルだったことがわかりました。外は夕暮れどきのような薄暗い明るさです。

遠くに見えた光の光源はるか前方にあります。太陽のような眩しい明るさではなく、
たぎりを焚いたようなうっすらとした明かりです。

私は立つことができたので、その光源を目指して歩き出しました。周りには誰もいません。まったくの一人ぼっちです。私はどこか朦朧もうろうとした感覚のまま、とにかく歩き続けました。

自分が服を着ていたかどうかは覚えていません。でも足は裸足でした。なぜそれがわかったのかというと、足の裏にチクチクさわる草の感覚をはっきり感じる事ができたからです。

しばらく行くと、ひじょうに大きな川に突き当たりました。私は「これが昔からよくいわれている三途さんずの川かな」と思いました。光源は川の対岸にあって、ぼうつと全体を照らしているように光っていました。とにかくあそこまで行ってみよう。私はそう思っ
て、船頭を探しました。

でも周りには誰一人見当たりません。葦が生えた川岸をしばらく探し歩くと、壊れかけた木の舟が一艘だけ見つかりました。オールはありませんでしたが、なんとか浮かびそうです。私は舟を川の中央に押し出して飛び乗り、舟先まで移動して、自分の両腕で水をかいてみました。舟は進んでいくようです。

しばらく私は夢中で舟を漕いでいました。でも水の抵抗があって、両腕がものすごく

くたびれるのです。ついに疲れ果てて休んだのが、川のちょうど真ん中あたりでした。ここまで来たら、もう対岸まで行くしかない。私は覚悟を決め、ふたたび腕で舟を漕ぎ始めました。

そのとき私はふと不思議に思いました。光源と舟の位置関係が変わらないのです。川は左から右に流れていて、当然舟も流されているはずなのに、光源の位置は変わらない。「あれ？ なぜ真つすぐ進んでいるんだろう？」と気になって、そんなことはどうでもいいのに、持ち前の理屈っぽい性格から、「なぜだ」「なぜだ」と思ったのを覚えています。

とにかくやつのことで向こう岸に到着しましたが、あまりに疲れたので、私はしばらく草の上にうつぶせに倒れていました。

どれくらい時間が過ぎたでしょうか。ふと頭をもたげると、一五メートルから二〇メートルくらい離れたところに焚き火のような明かりが見えました。しかもそのあたりに、まるでかげろうのように人のシルエットが揺らいでいるのです。ゆらゆらとしたシルエットは四、五人見えます。

すると、そのうち一人が私に近づいてきました。喪服を着た中年の女性でした。その

とき私は女性が誰だかよくわからなかったのですが、あとになって、私が生まれて間もなく、若くして亡くなった私の伯母に瓜二つだということがわかりました。

それはともかく、喪服の女性は私に向かって、「鶴彦^{つるひこ}、おまえ、何しに来た？」というのです。でも私に答えられるはずがありません。私だって自分の状況がわからないのですから。

まごまごしていると女性は私を焚き火のほうに連れていきました。そこにはおばあさんが二人、おじいさんが一人、青年が一人いました。

お年寄りたちが誰だかわかりませんでした。青年の顔を見て、私はびっくりしました。何年前かにブルドーザーにはさまれて、二十代の若さで亡くなった私の従兄弟だったからです。私たちは再会を喜び合いました。

ごく自然に、私たちは親戚や伯父の話題に花を咲かせていました。すると喪服の女性が私に近づいて来て、「ついておいで」というのです。

私は従兄弟たちに別れを告げ、女性のあとに従いました。しばらく行くと、前方になだらかな丘が見えてきました。木はまったく生えていない、草原のような丘です。

女性はその斜面をどんどん登っていきます。丘の頂上の稜線の向こう側には、金色に

輝いている空がふわっと見えています。丘の反対側はこちらよりはるかに明るいようです。

ついに頂上まで到達すると、向こう側はあたり一面の花畑でした。なだらかなスロープが続く、そこかしこに花が咲き乱れているのです。何の花かわかりませんが、とてもいい香りがします。

空を見上げると、天には金色の大きな光がありました。その明かりのせいで、あたりは金色に輝いて見えます。

稜線の上に立つと、心地よい柔らかな風が吹いてきました。風に運ばれて花の香りが漂ってきます。私はいままで感じたことがない幸福感に包まれながら、花畑のスロープをゆっくり下りていきました。

その最中、天上の金色の光からふわっと光の塊が噴出したのが見えました。それは光の尾を引きながら龍のように空中を自由に泳ぎ回ります。そして私のすぐ目の前まで来ると、私の顔を覗き込みました。その瞬間、光の中に人の顔が見えた気がしました。

それが誰だかわかりません。でも高貴で美しい女性のように見えた。私が宗教を持っていれば、きっとマリアさまか観音さまに見えたのかもしれませんが。

そのまま私はなだらかな丘を下り続けました。そしてふと気がつくと、いつのまにか、喪服の女性がいなくなっていたのです。

「あれ、どうしたんだろう。どこに行ったんだろう」。心配になって周囲を見回しているうちに、突然、フワツという感じで目が覚めました。ちょうど夢から急に覚める感じです。私はベッドに寝ている自分に戻ったのです。

肉体を離れた

「意識」に「自分」がある

私の上にはライトと点滴があって、横には母が座っていました。

「いまのあれは何だったんだろう。俺は夢を見ていたのかな。俺は生き返ったのかな」そしてふとあることに気づきました。あれほど苦しかった全身の痛みが嘘のように消えていたのです。意識は鮮明にあるのに、痛みをまったく感じない！ 全身が押しつぶされるようなあの鈍痛がまったく消えているのです。

私は医師にそのことを聞いてみようと思い、手の中にあったナースコールを押そうと

しましたが、なぜだか力が入りません。そのとき自分の心臓が止まるのがわかりました。ドクン、ドクンと脈打っていた脈拍が急に止まったからです。そのあと呼吸ができなくなりしました。吐いて、吸って、吐いて、最後にすーっと深く吸ったら、それっきり呼吸ができなくなったのです。

人間は生まれるときに「オギャー」という産声とともに息を吐き、亡くなるときのことを「息を引き取る」といわれますが、あれは本当だったんだな、と思いました。

でも息ができなくなったのに、不思議と苦しみはありませんでした。母が私の顔を覗き込み、体を揺すりながら「あつ、死んじゃった！」とっています。あとで聞くと、私の首が突然カクンとなったそうです。

母がベッドサイドで寝ていた父を揺り起こして、大騒ぎが始まりました。

その間、私はずっと意識があるので、不思議な感覚でした。先ほどの洞窟や花畑にいたときの夢の中にいるような感覚とは違って、今度はまさに生きているときとまったく同じ。ただ痛みがないだけで、あとは現実そのものの自分がそこにいました。

父は気が動転して足元からこちらを見ているので、私は「大丈夫だよ」と声をかけました。でも反応がありません。もう一度、声をかけようと自分の体を起こしました。そ

して「おやじ」と声をかけたのですが、まったく視線が合わないのです。父は私の顔ではなく、お腹のあたりを見つめています。

「おやじ、俺、ここにいますよ」。私はベッドサイドに腰掛け、立ち上がるために腰を持ち上げようとした、そのときです。振り向きざまに見えたのはベッドに横たわっている自分の体でした。

「あれ？」と私は思いました。自分はベッドサイドで起き上がり、父の前にいる。なのに、体だけはベッドで寝ている。「これはどういうことだろう？」

そういうとき「自分」という主体は体ではなく、意識のほうにあります。だからベッドで寝ているのは「自分」ではなく、木内鶴彦そっくりな別の人がそこにいるという解釈しかできません。

私は父と一緒に寝ている私を見つめました。そして横にいる父に向かって「おやじ」と呼びかけようと思いました。すると突然、私の意識は瞬間移動し、父の目線からベッドの上に寝ている私（木内鶴彦）の肉体らしきものを見ていたのです。つまり、父の体の中に入ったのです。

先ほど父が私のお腹の辺りを見ていた理由もそれでわかりました。その位置に私

の肉体らしきものゝ顔があったからです。つまり父は意識体である「私」ではなく、私（私）の肉体らしきものゝを見ていたのです。

私と視線が合わなかったのもそういうことか、と私は納得し、父に「俺は大丈夫だよ」と話しかけました。そしてごく自然に父の体から抜け出すことができました。

あとで父から聞いたのは「大丈夫だよ、というおまえの声が聞こえた」ということです。「おまえが大丈夫だ、といったから、俺はおまえが助かるとずっと思っていたんだよ」と父は何度もいいました。

私が父の体の中に入ったことは信じてくれませんでした。声が聞こえたことは認めてくれたわけです。

父の体を抜けた私は、ふたたびベッドサイドに立ちました。あたりは騒然としています。看護師さんが飛び込んできて、私の肉体らしきものゝに酸素マスクをつけようとしています。私はベッドサイドにいては邪魔になると思い、反射的に看護師さんの体によけたのですが、私の「意識」には体がないのですから、いま思うとその必要もなかったのかもしれない。

もう一人の看護師さんが横たわっている私（私）の肉体らしきものゝ体の上に馬乗りに

なり、心臓マッサージを始めました。私はベッドサイドで父と一緒にしばらくその様子を眺めていました。自分で自分を見ているのは、なんともいえず不思議な感覚でした。ふと気がつく、さっきまでベッドサイドにいた母がいません。「あれ？ おふくろ、どうしたんだろう？」と思ったそのときです。私は病院の玄関脇にある公衆電話で親戚に電話をしている母の横に瞬間移動していたのです。

これはあとでお話しますが、この世界が縦、横、高さの三次元だとすると、時間軸を加えた（つまり過去も未来も自由に行き来できる）空間が四次元、そして「意識」が加わった（つまり意識が自由に移動できる）世界が五次元だと思います。人間は死ぬと五次元の世界に行くのではないのでしょうか。

五次元の世界では、私が父の中に入り込んだり、母の横に瞬間移動するといったことが可能になるのです。

肉体を抜けて意識だけの存在になった私は、母のところに瞬間移動し、横に立っていました。気が動転している母はうまく電話のダイヤルが回せません。何度も何度もかけ間違えるので、私は横で母のアドレス帳を覗き込みながら、「何番、何番」と親戚の電話番号を教えてやりました。でも母にはまったく聞こえていないようでした。

母は親戚たちに連絡して「いま、息を引き取ったから」という話をしています。私は母の耳元で「まだ生きているぞ。俺は大丈夫だ」と叫んでいるのですが、母には伝わりませんでした。

そこで姉たちはどうしているのかなと思った瞬間、私は姉たちのところに瞬間移動していました。

義兄が運転する車の中で、姉たちの間に座っていたのです。姉たちや義兄が話していることも全部わかります。私がそこにいるのに、姉たちは葬式の話などをしているので、「俺はまだ生きているぞ」とここでも叫んでしまいました。

それにしても思っただけで、その場所に行ける。この不思議な現象をどうとらえたらいいのか、私は自分でもわかりませんでした。考えれば考えるほど不思議です。試しに今度は病室のことを考えると、思った通り、瞬時に病室に戻っていました。

病室では先生や看護師さんたちが何人もベッドを取り囲んで大騒ぎをしています。私は彼らの後ろから眺めていたのですが、なんとも不思議な光景です。私はここにいるのに、みんなは私の肉体らしきものに必死に何かをしています。

私はだんだん面白くなってきました。ちょうどその頃、アインシュタインの相対性理

論などを勉強していたので、自分が空間を瞬間移動できることがとても興味深く思えたのです。

「これって空間移動だよな。ならば過去にも行けるのかな」

ふとそう思ったのも、私にはどうしても気になる過去のある出来事があったからです。

● 幼い自分に 声をかけたのは誰だったのか？

話は私がまだ幼い六歳の頃にさかのぼります。私は三人の姉、兄ときょうだい一緒に千曲川に泳ぎに行くことになりました。

河原に下りていく道は岩だらけの歩きにくい崖で、大きな石がごろごろしています。

私たちは石をよけながら、仲良く道を下っていました。

そのときです。私の背後で「危ない！」という声が聞こえたのです。振り返ると、姉の頭上に大きな石が落ちてくるのが見えました。無我夢中で姉の背中を突き飛ばし、自分も後方に倒れた瞬間、一メートルほどもある大きな石が私と姉の間をゴロゴロと砂け

むりをあげながら転げ落ちていきました。

私に突き飛ばされた姉はそのまま前のめりでズルズルと崖を滑り落ち、私は後ろにひっくり返っていました。姉は足の親指の爪をはがしてしまい、大泣きに泣いています。

先に下りていた兄や姉たちは私がわざと姉の背中を押したと思ったようです。

「なんで押すんだ」「おまえが押すから姉ちゃんが怪我したんだろう」

私は「誰かが危ないと教えてくれた」と必死で訴えたのですが、信じてもらえませんでした。

「嘘をつくんじゃない」「誰もそんな声は聞いてないよ」

ひどく叱られた私でしたが、自分では姉を救ったという自負がありました。その思いがあったので、あのとき聞いた「危ない」という声の主が誰だったのか、ずっと気になっていたのです。

病室で自分が不思議な状態になったとき、真っ先に閃いたのはそのときのことでした。「時間と空間を超えて、自由に行きたいところに行けるなら、あのときのあの場所に絶対に行ってみよう」

私は六歳のときのあの河原の光景をぐっと思ひ出してみました。するとどうでしょう。

私はあのとときの千曲川の河原の崖に瞬間移動していたのです。

「声がしたのはこのあたりだったよな」。崖があるその場所に行ってみると、五メートルほど下の道を幼い私と姉が歩いていくのが見えるではありませんか。

しかも二人の行く手には、頭上に大きな石があつてぐらぐらしています。二人は気づかずにとんどん進んでいきます。このままでは石が落下するかもしれません。ぐらぐらする石は別の石と連動しています。私は思わず叫んでいました。

「危ない！」その瞬間、幼い私はこちらを振り向きしました。そして姉の背中を押し、自分は後ろにひっくり返ったのです。間一髪、姉と幼い私の間を大きな石がゴロゴロと転がり落ちていきました。

六歳のとき、私に「危ない！」と声をかけたのは、ほかならぬ私でした。あのとときの声の主は自分自身だったのです。

よく守護霊に守られたとか、ご先祖さまに助けてもらったという話を聞きますが、私はあれは自分自身ではないかと思えます。その人が未来において亡くなったとき、自分の意識が過去に戻って、過去の自分に介在しているのではないのでしょうか。

自分のことは、自分が一番よくわかっている。だからこそ、一番必要なときに、未来

の自分が助けに来る。そう考えると、つじつまが合うような気がします。

● 未来に行つて見てきた映像は 現実に起こった！

過去に戻った私はふたたび病室に戻りました。私はちょっと楽しくなっていました。こんなに自由に動き回れるものなら、今度は未来がどうなっているのか見てこれるのではないか。

でもその頃から私は自分の意識とは別のもう一つの意識がじわりじわりと押し寄せてくるを感じていました。うまく表現できないのですが、私が持っている意識とは比べものにならないほど膨大で果てしない存在です。

すべての記憶、すべての経験、すべての感覚を一つにしたような渾然とした存在とでもいうのでしょうか。その中では「私」も「あなた」もない。すべてが一体として存在する、悩みも苦しみもない世界です。

これは私の想像ですが、おそらく人は死ぬと、「この膨大な意識体」に吸収されてい

くのではないでしょうか。そこには「我」もなければ、「個」もありません。素晴らしいといえは素晴らしいのですが、私のような好奇心の強い人間にしてみれば、ややもすれば退屈きわまりない世界ともいえます。

人は皆いつかはその意識体に吸収されてしまうのだと思いました。もしそうだとすると、私はもう少し自由に動き回れるこの経験を楽しみたいと思いました。そこで、その意識体に反発するように、未来のことを強く思ってみたのです。

もちろん過去や現在を思うのと違って、未来は具体的に場面や光景としてイメージすることができません。ですから本当に漠然となってしまうのですが、私は自分の未来のことを強く念じてみました。

すると二つの未来の場面に瞬間移動したのです。一つは三〇畳ほどもある大きな畳の部屋でした。三〇人ほどの人がコ字になって座り、灰色のシャツを着た一人の人の話を熱心に聞いているのです。部屋には立派な床の間があり、朱色をした幾何学模様の由緒がありそうな掛け軸がかけられています。

私の視点はちょうど部屋の天井あたりから、斜め四五度の角度で部屋全体を見ている感じでした。誰が話しているのだろうと、私は話し手のほうに移動してみました。そし

て顔を覗き込んで「あっ！」と驚きました。

なんと中年になった自分が星について語っているのです。内容までは覚えていないのですが、話しぶりからするとひじょうに重要な会議のようでした。

「これが未来だとすれば、俺は生きているんだな」とうれしく思いました。

もう一つ見えた未来はじつに不思議でした。写真が二重写しになったように、二つの場面が重なって同時に登場したのです。一つは年を取った私が、場所はわかりませんが、子どもたちと一緒に望遠鏡を覗きながら、楽しそうに星の話をしている場面です。

二重になっているもう一つの場面は廃墟になった町を、やはり年老いた自分が呆然と歩いているところです。何が起きたのかはわかりません。あたりには焼け焦げて死んだ人や怪我をした人たちが横たわっている。その中を私はなすすべもなく歩き続けているという不吉な場面でした。

ちなみに最初の広い畳の部屋で会議をしている未来は、すでにもう実現されています。二二歳のときの臨死体験から一八年後の一九九四年、私は高野山で開かれた「世界将来世代京都フォーラム」に招かれて、講演を行うことになりました。

会場となる高野山の清浄心院は真言宗の修行寺です。不思議なことに私は会場に

入ったときから、既視感に襲われていました。生まれて初めて訪ねる高野山なのに、どこか懐かしさを感じるのです。

もしかしたら、あのとき臨死状態で見た、コの字の形で人が並んでいた畳の部屋かもしれない……。でも床の間にかけてある掛け軸の絵が違いますし、部屋の感じも微妙に異なります。

思い過ぎしかとがっかりしたのですが、夕方になって、講演を行うために後ろの襖が開けられたときです。私は「あっ」とのけぞるくらい驚愕しました。

あのとき見たのとうり二つの三〇畳ほどの和室が現れたからです。よもや襖の向こうにもう一つ部屋があるうとは、思ってもみませんでした。

コの字に並べられた座席の位置、床の間にかけられた朱色の幾何学模様の絵も、私が臨死状態で見たものとまったく同じでした。鳥肌が立つとはこのことです。私は驚愕しながら、さらに一致点がないかと懸命に記憶を掘り起こしました。

「そういえば、あのとき講演者は灰色のシャツを着ていたな」

私は自分のポロシャツを見ました。緑色です。

「何もかも一致するわけではないんだな」

そう思って演台に立ったときでした。頭上にある蛍光灯の光のせいで、私の緑色のポロシャツがぼんやりとした灰色に見えたのです。あのとき見た場面とすべてが一致します。

臨死状態で見た未来は現実になりました。実際に私はあのとき未来に行っていたことがこれで実証できたわけです。

ということは、もう一つ見た二重写しになっている未来はどうなるのでしょうか。老人の私が子どもたちに星について語っている平和な未来と、破壊された町を彷徨う不吉な未来。

おそらくこの未来はまだ定まっていけないのではないのでしょうか。未来には「最良の未来」と「最悪の未来」があり、どちらを選択するかは現在の私たちにかかっているのではないかと思います。

そして私が臨死状態から生きて戻ってきたのも、未来を見てきた者として、私たちが「最良」の道を歩めるよう、働きかける使命を担ったからではないのでしょうか。このときはまだその使命について自覚さえなかった私ですが、平和な未来と不吉な未来の両方を見た経験は、その後の私の人生を大きく変えていく転換点になったのです。

● 友人の意識に入り込み、 試してみたこと

自分の未来に行けたことで、私は自分が生き返るのではないかと、確信を持ちました。そうでなければ、自分の未来に行けるはずがありません。ならば、生き返ったときのために、自分が「意識」だけになり、時間と空間を超えて自由に移動できたことを証明したいと思いました。

こんなことが冷静に考えられるくらい、臨死状態では意識が鮮明だったことも大きな発見です。肉体は死に瀕（ひん）しているというのに、意識だけは生きているときとまったく変わらない。むしろもっとクリアになって、普段以上に緻密に物事が考えられるようになっていたのは驚きでした。

私は臨死状態にあるときに、いくつかの仕掛けをしてきました。一つは友人を使っての実験です。もし私の意識が自由に移動できるなら、私が病院で臨死状態にあるのと同じ時間帯に、長野県にいる友人たちのところに行つて、何をしているのか見てくること

もできるわけです。

そこで、長野の友達のところに行つてみることにしました。友人の一人を思い浮かべた瞬間、私は彼が経営しているガソリンスタンドに移動していました。田園風景が広がる国道沿いのガソリンスタンドの事務所で、友人はストープを囲みながら、別の友人二人と世間話に興じていました。たまたま私と共通の友人でもある二人が帰省していて、彼のガソリンスタンドに集まっていたようです。

三人の友人は昔のバカ話や共通の知人の近況報告などで盛り上がっています。私も彼らの間に座り、一緒に笑い転がっていました。でも彼らに私が見えていないのが残念な気がしました。

外を見ると、信号待ちの車が渋滞しています。私はふとこんないたずらを思いつきました。もし私が先ほど父親の意識の中に入つて、「大丈夫だよ」と告げたように、友人の意識の中に入り込めるのなら、その意識に何か働きかけができるのではないかと。

そこで友人の一人の意識の中に入つて、渋滞している車の運転手の顔を私の顔にイメーজさせてみたのです。すると驚いたことに友人が三人ともいっせいに反応を見せ始めました。私が入り込んだ友人が「木内、木内」と私の名前を呼んで車を指さすと、残り

の二人も車に手を振るではありませんか。

イメージの連鎖が起きたようです。友人の一人は車に向かって走り出そうとします。もちろん、車を運転しているのは、私とは似ても似つかぬ別人です。

そのとき信号が変わって車は走り去っていききました。友人たちは私が無視したことに腹を立て、ぷりぷり怒りながら私の悪口を言っています。

私が入り込んだ友人だけでなく、一緒にいた友人二人にも連鎖反応が起きたことが意外でした。おそらく幽霊を見たという目撃談も、これで証明できるように思います。思いの強い意識体が誰かの意識に入り込み、何かをイメージさせたとき、一緒にいた人まで意識が連鎖していくのです。

だから幽霊は決して怖いものではありません。亡くなっていく人の思いそのもの、それがプロジェクターのように現実投影されたもの、と考えれば、心霊現象なども決して不気味なものでもなんでもありません。いずれは当たり前前の科学現象として見る事ができる日が来るのではないのでしょうか。

とにかく、友人三人に強烈な印象を与えたのですから、生き返ったら、絶対確かめに行こうと決意して、私はその場を離れました。

この話には後日談があります。私が臨死状態から蘇生して退院したあと、真っ先に向かったのは長野の友人のところでした。どうしてもこの日のことを確かめておきたかったからです。

友人のガソリンスタンドを訪ねると、彼は私の顔を見るなり、「おまえ、この間、車でここを通っただろ。どうして寄らなかつたんだ」と怒るのです。「いつ頃？」と聞くと、「みんなが来たときだから、たしか四月一〇日だったな」と言います。

間違いなく、私が危篤状態に陥った日です。私は病気のことはふせておいて、「いや、その日は長野に帰ってなかつたよ」と告げました。友人は怪訝けげんそうに私を見つめ、「勘違いだったかな。それにしても、木内そっくりだったけどな」とまだ腑に落ちない様子です。

彼からはさらに興味深い話を聞きました。友人たち三人が車に乗っている私の顔を見た日、彼らは三人ともひどい頭痛に襲われ、次の日は寝込んでしまったのだそうです。健康そのものの若者が三人とも、しかも同じ日に頭痛で寝込むのは常識では考えられません。これも私の仮説ですが、おそらく私が無理やり彼らの意識の中に入ったことで頭痛が起きたのではないのでしょうか。

死んだ人が見えるとか、霊の憑依ひょういしたなどという人が頭痛を訴えるのも、これで説明がつきます。私は思い切って友人に臨死体験のことや、危篤状態だった日にガソリンスタンドまで行ったことを話しました。

しかし友人は最初のうちこそ面白そうに聞いてくれましたが、だんだん警戒する顔つきになってきました。そして最後には「そんなバカなことはあり得ない」「おまえの勘違いだ」と強く否定するようになったのです。

その後、友人との関係もぎくしゃくして、前のように気さくなものではなくなりました。私が前と変わらぬ態度で接しようとしても、向こうが警戒してしまうのです。

そういうことがあってから、私は、たとえ親しい人といえども臨死体験の話は安易にすべきではない、と考えるようになりました。

どうせ話しても信じてもらえないし、頭がおかしいと思われるのがおちです。友人たちとの間がぎくしゃくしたように、へんに警戒されても困ります。二二歳のとき、臨死体験というひじょうに特異な体験をしたにもかかわらず、長く私がその経験を封印してきたのは、こんな理由があったからです。

○歌集に残した「つる」の文字

それはともかく、臨死状態の最中にあつたとき、私はこの体験をなんとか証明したいと考えていました。友人たちにいたずらをしかけたのも、その一つでしたが、もっとしつかりした証拠を残したいと思いました。

もしこれが単なる夢や幻覚であれば、証拠は残りません。でももし真実であれば、こんな希有な体験をしたのですから、科学的にもしつかり検証できるよう、確実な証拠を残しておきたいと思ったのです。

しかし私には肉体がありませんから、文字に書いたり、物をつくったりして痕跡を残すことができません。

どうしようかと思いいながらも、私は好奇心の赴くまま、時間や空間を超えて、無我夢中で移動する体験を堪能していました。

あとで蘇生してからわかったことですが、私が臨死状態にあつたのは心臓が止まって

から蘇生するまでの三〇分にも満たない時間でした。でも私には永遠に続くかと思われ
るほど長い時間に感じました。

その間、ものすごいスピードであまりに多くの時と場所に行ったために、私の頭はパ
ンクしそうでした。

そのため、生き返ったとき、しばらくの間はかなりの部分を思い出せないことがあ
りました。でもそれらは何かのきっかけがあると、スイッチが入って覚醒したかのごとく
鮮明によみがえってきました。臨死体験で時空を旅した記憶は、私の意識の中にはつき
りと刻まれているのです。

夢中で旅した先の一つに、江戸時代の風景があります。平安時代から歌人を輩出して
きた家で、私の前にも一人の歌人がいました。私は、父の意識に入り込んだように、そ
の男性の意識の中に入ってみました。

そして男性の目線で目の前の和紙を眺めてみました。そのとき思ったのは、もしその人
の体を借りて、何かを残すことができれば、私がその時代、そこに訪れた証拠になるの
ではないか、ということです。

気がつくと、男性の意識の中に入り、自然に鶴彦の「つる」と書いていました。

もし生き返ったら、絶対にこの証拠を見つけよう、と私は心に誓いました。男性は和
歌の名手であることはおぼろげにもわかっていました。

蘇生してから、私はその文字がある家を探し求めました。記憶と伝手を頼りに辿り着
いたのは、京都のある旧家でした。歴史的にも名前を残す家で、先祖は、小倉百人一首
にも歌が納められている和歌の名手です。

その家には、歴代の当主が詠んだ和歌を集めた歌集がありました。

子孫の方から、歌集の中に、意味をなさない「つる」の言葉が入った歌が一首あるこ
と、子孫の間では代々、それが謎となっていたことを教えていただきました。

その歌には植物の蔓も、鳥の鶴にまったく関係なく、ましてや、その箇所「つる」
の文字があることは、字余りであるばかりか、洒脱さも名家の歌人ならではの味わいも
なく、ただの蛇足にすぎないとのこと。解釈のしようがないので、子孫の間では、「なぜ、
つる？」と、長らく疑問に思われてきたとのことでした。

私は自分の臨死体験の話をし、特別にその歌集を見せていただきました。

すると、ありました。「つる」の文字。間違いありません。あのとき男性の体の中に入
って、私が書いた「つる」です。これで私があのととき、ここに来たことが証明されたわ

けです。

子孫の方も、「これまでずっと謎に思われてきたことの意味がわかった」とおっしゃっていました。

臨死体験を経た直後は、もしかしたら私が経験したことは危篤状態で見た単なる夢か幻覚に過ぎないと自分に言い聞かせたこともありましたが、一時的に頭がおかしくなったと思ったこともあります。

でもその後、年月を重ねるにつれ、あの体験が真実だったことが次々と証明されていくのです。

私にもう迷いはありません。いまは臨死体験で得た経験を皆さんに伝えていくことが私の使命であると確信しています。

◎ 珍しい症例として 学会でも報告される

未来や過去、ありとあらゆる場所に瞬間移動しながら、ものすごい勢いで旅をするの

は、言葉に尽くせないほど楽しい体験でした。でも、私が肉体を持つこちらの世界に戻るときがやってきました。

それは突然やってきました。ふんわりとした、でも何かものすごく圧力のある物体にぼーんとはじき飛ばされるような衝撃を感じたのです。おそらくあの世とこの世を結ぶ境界を越えた反動ではなかったでしょうか。次元の壁があるとすると、五次元から三次元へ入っていくときの衝撃波かもしれません。そして気がつくと、私は病室に戻っていたのです。

病室では医師や看護師たちが私を蘇生させようと、懸命の努力を続けていました。私は生き返りたいと強く願いました。なぜなら、臨死体験で見たさまざまなものが真実なのか、それとも単なる幻覚や夢なのか、ぜひとも確かめてみたいと思ったからです。そのための実験や証明する痕跡もつくってきました。なんとかして生き返り、自分で検証してみたいと思いました。

そこで父の意識の中に入ったように、ベッドで寝ている自分の身体に近づいてみたのです。すると次の瞬間、私は自分の肉体に戻っていました。口に装着されている酸素マスクの感覚がぼんやりとわかったその瞬間、意識だけのときはまったく感じられなかつ

た体全体の疼痛もよみがえってきました。

肉体がなかったときはあれほどクリアだった私の意識も、肉体に戻ったとたん混濁してしまいました。すべてが夢のようにぼんやりした状態のまま、どれくらい時間が経ったのでしょうか。

私は体の右側を下にして、海老のように丸まってベッドに寝ていました。ベッドサイドで私の叔母が懸命にスプーンで私の口に何かを入れようとしています。ぼんやりした意識のまま飲み込むと、それは重湯でした。最後に食べ物を食べたのはいつだったか。

「ああ、うまい」

思わず言葉がもれました。完全に肉体の感覚を取り戻していたのです。

「意識が戻ったよ」。叔母が大声をあげました。看護師さんやお医者さんがやってきます。夢から覚めるように少しずつ私は意識を取り戻していきました。意識が戻ったのは、危篤状態を脱してから一〇時間ほど経っていたそうです。

それから私は少しずつ食べ物を口に入れられるようになりました。体を右側にして寝ていると、背骨と動脈の間にわずかなすき間ができ、十二指腸の閉塞が防げるそうです。そのため、口から食べ物が食べられるようになったのです。

決死の覚悟で強行したレントゲン検査の結果、そのことが判明し、医者の指示でそのような姿勢をとらされていたわけです。

不自由な姿勢でしたが、そのおかげで少しずつでも食べ物をとることができ、体力は急速に回復していきました。二二歳という若さも私に味方してくれました。

約三週間で私は手術に耐えられる体力を取り戻していました。そして無事、十二指腸のバイパス手術を受け、退院することができたのです。世界でもめったにない「上腸間膜動脈性十二指腸閉塞」で助かった症例ですから、私の病状の詳細はすべて記録され、学会でも報告されました。

私の症例が珍しかったこともあって、入院中はもちろん退院してからも私はいろいろな医療関係者からヒアリングを受けることになりました。私の麻酔を担当した医師は危篤状態に陥った私の脳波や心電図のデータを見ながら、「このとき、何か見ませんでしたか？」としきりに聞いてきました。彼の関心は十二指腸閉塞そのものよりも私の臨死体験にあったようです。

私は心臓が止まる前の洞窟や川を渡った話、花畑や亡くなった人と出会ったことなどは具体的に話しました。病院関係者の間でも、死にかけた人がトンネルや光、花畑を見

ることは知られたことだったからです。

でも心臓が止まってからのこと、自分が意識だけの存在になって、自由自在に時空を飛び回ったことは話せませんでした。自分でもあまりに荒唐無稽すぎて、これが真実のことなのか整理がつかず、まだ人には話さないほうがいいと思ったからです。

とくに友人たちから奇異な目で見られる経験をしてからは、私はひじょうに慎重になりました。この体験はめったなことでは人に話してはいけない、と私は自分に言い聞かせました。

でも、臨死体験の中で残してきた痕跡やそのとき見た未来が次々と証明されていくにつれ、人から変人扱いされてもかまわない。自分には見てきたことを語る使命があると思うようになったのです。

● 第一次臨死体験と 第二次臨死体験がある

私にとって臨死体験ははっきりと二つにわけられます。すなわち、心臓が止まる前の

洞窟や花畑の丘にいた体験、これを第一次臨死体験とすると、心臓が止まったあと、意識だけになって時空を移動した体験は第二次臨死体験といえます。

一次体験のほうは、ぼんやりとした夢の中のような出来事でした。泥の中を這い回ったり、草を踏む皮膚感覚ははっきりあっても、頭のほうはぼうつとしたままです。

でも二次体験のほうは、まるで現実そのものです。肉体がないことだけを除けば、いまここでこうしている私自身そのものなのです。判断したり、思考したり、喜んだり、驚いたり……。ふつうに生活しているときの自分のまま、時空を超えた世界を旅している感覚です。

この二つはあまりにかけ離れた経験なので、「臨死体験」として一括りにすることはできないと思います。

のちにジャーナリストの立花隆さんが『証言・臨死体験』（文春文庫）という本を出されるとき、私は立花さんからインタビューを受けました。世間には「あの世を見てきた」とか「臨死体験をした」という人がたくさんいます。しかし立花さんはインタビューをする際に、臨死体験の経験者で信頼できる人を選んで会っているそうです。

私のことも、医師から確かに臨死体験をしているという確証を得た上でのインタビュー

—だったと聞いています。

たくさんさんの臨死体験の事例を集めた立花さんとお話ししたり、お書きになっていることを読んで、私も同意見なのは、臨死体験のうち、一部は脳の機能が低下したときに現れる一種の幻覚作用ではないか、ということなのです。

これは脳外科医や救急医なども指摘していることですが、脳の機能が低下したり、脳に十分な酸素が行かなくなると、脳に幻覚作用があらわれるのです。

死の恐怖や苦痛を回避するために、脳内麻薬のエンドルフィンが出て、一種の幸福感に包まれるのではないかと、脳内に二酸化炭素が溜まると幻覚が見えるのではないかと、さまざまな説があるようです。

また交通事故や脳卒中などで一時的に脳の機能が停止したあと、すぐに体が蘇生して脳も生き返ると、脳内だけで見ていた幻覚と、蘇生した肉体が感じ取っている病室内での出来事が入り交じって記憶されることもあるかもしれません。

だから意識不明だったのに、病室内での様子や医師との会話を「知っている」という現象も起きるのです。

脳が一定の状態になったときに夢や幻覚が現れると考えると、一次臨死体験をした人

たちが見るイメージ——トンネルや光、亡くなった人、花畑などが、国境、民族、性別を超えて共通していることも、脳内の生体反応だといえれば説明がつきます。立花さんも私の一次臨死体験のような話は珍しくないと話していました。

問題は、はっきりした意識のまま時空を超える経験をする二次臨死体験のほうです。

ましてや、私のように生き返ったあと検証できるように、さまざまな仕掛けを残してきた例はほとんどありません。

こちらは一次体験に比べると、経験者が圧倒的に少なくなります。二次臨死体験の特徴は、脳波がほとんど停止していることです。一次体験では脳がまだ「生きて」いますから、脳が見た夢や幻覚だといわれれば、それも一理あるかもしれません。脳波計にも夢や幻覚を見るときのような反応が出ることもあるそうです。

でも二次体験のほうでは脳波計が反応していないのが特徴です。最近、アメリカのハーバード・メデイカル・スクールで脳神経外科の医師が臨死状態になった事例があります。彼は脳の機能がほとんど停止してしまっただけにもかかわらず、死後の世界を克明に見てきました。その話がベストセラーになったそうです。

脳が反応していないのに、そのときの鮮明な記憶があるのはどうしてでしょうか。こ

れを医学的にどう証明したらいいのでしょうか。

しかも私の場合、そのときの記憶は、年月を経てからも、ときどきフラッシュバックのように鮮明によみがえってくるのです。

二三歳のときの臨死体験で得た膨大な知見が、そのときは頭がパンクしそうで思い出そうとしても、混沌として整理が付きませんでした。後年になって、自分がいろいろな勉強を重ねたとき、突然「あのときのあれは、こういうことだったんだ」と鮮明過ぎるほど鮮明によみがえってくることがあります。

アイデアが詰まったとき、突然、情報が降ってくることもあります。それが太陽光発電や放射能の汚染水対策のヒントとして、いまの最新の科学とぽんと結びつくこともしばしばです。

これが単なる夢や幻覚であれば、何十年も前に見た夢のことなど、とうに忘れていたはずではありませんか。あなたは自分が二三歳のときに見た夢を覚えていますか？

でも私が二次臨死体験で見てきたこと、経験したことは、何十年経っても鮮明にフラッシュバックし、さらには自分では認識していなかった埋もれた記憶さえよみがえってきて、パズルがはまっていくように現代の先端科学と結びつくのはどうしてでしょうか。

あのときの臨死体験には、脳の機能や生体反応だけでは証明できない何かがあると思います。それが何なのか、私はその正体についてずっと悩み、一人追い続ける人生を送ることになります。

第二章

あの世はどんなところなのか
二度目の臨死体験



宇宙が私に 生き方を示してくれた

腸閉塞で入院し、九死に一生を得た私は、航空自衛隊に復職しました。しかし夜間勤務もある航空管制官の仕事は長く続けることはできませんでした。病気のため、肝機能が衰えてしまい、仕事も休みがちになってしまったからです。

体力的に限界を感じた私は故郷の長野に戻るようになりました。小学生の頃から天体に興味を持ち、星の観察などを続けていましたから、故郷の長野で天体観測ができる天文台つきのペンションを経営しようと思ったのです。

しかしこの話はうまくまとまりませんでした。やむなく私は地元のレストランに就職し、仕事の合間を見つけては、長野の山々に登り、星の観察を続ける生活に入りました。夕方仕事を終えると、望遠鏡をかついで山に登ります。そして一晩中、星を観察し続け、朝方家に戻ってきます。わずかの時間、仮眠をしてから仕事に行く。睡眠時間は二～三時間という日もざらでした。

それでも好きな宇宙を眺めている時間は飽きることがありませんでした。不思議なことに大好きな天体観測をしている間は、どんなに睡眠時間が少なくても、体力的に疲れることはなかったのです。

それどころか、毎晩の山登りで体が鍛えられたのか、私は次第に健康を取り戻しました。いつしか私の生き方は、新しい彗星や小惑星を発見する「彗星搜索家」に軸足を置くものへと変わっていきました。

三五歳で初めて新しい彗星「チエルニス・木内・中村彗星」を発見することに成功した私は、幸運にも翌年も連続して新彗星「土屋・木内彗星」を発見することができました。世界中の彗星搜索家が、天体に輝く自分の名前がつく彗星を夢見て、毎晩、目をこらして宇宙を眺めていても、その夢がかなえられる人はきわめて少数です。

しかし私は二年連続して新しい彗星を発見し、自分の名前をつけることができました。こんな奇跡はありません。そのおかげで天文家仲間の間で「木内鶴彦」の名前は国内外で多少なりとも知られた存在になりました。

そして三九歳のとき、世界中の彗星搜索家が躍起になって行方を追っていた「スウィフト・タットル彗星」の再発見に成功したのです。この彗星は私が発見するまで、じつ

に一三〇年もの間、行方不明になっていたものです。二度ならず、三度も彗星を発見したものですから、私は世界中からにわかに注目されるようになりました。

さらにこの「スウィフト・タットル彗星」について世の中の注目を集める事実がわかりました。この彗星がこのままの軌道で進むと、二二二六年には地球に衝突するかもしれないということが、アメリカのスミソニアン天文台の発表でわかったのです。

スミソニアン天文台のマスデン博士から直接そのことを知らされた私はあちこちの講演会やフォーラムに引っぱりだこになりました。関西文化学術研究都市の都市開きのオープニングセレモニーでの基調講演をはじめとして、ノーベル物理学賞を受賞された、小柴昌俊先生に招かれて、岐阜県にあるニュートリノ観測施設のカミオカンデで講演を行ったこともあります。

さらに京都で開かれた「世界将来世代京都フォーラム」に参加、六四カ国の代表者を前に彗星が地球に与える影響などについて見解を述べさせていただきました。

長く封印してきた臨死体験について少しずつ話し始めたのも、この頃です。たまたまキヤノンのCMでご縁をいただいた龍村仁監督に臨死体験について話したところ、監督がたいへん興味を持ち、あちこちで私の例を引き合いに出してくれました。そのため

「臨死体験者・木内鶴彦」の名前も知られるようになりました。

私が臨死体験を中心にした活動を始めると、まるで何か見えない力が働いているかのようになり、私のよき理解者が集まり始めました。

そして、しばらくして私は二度目の臨死体験を経験することになります。私が五五歳のときでした。

● 皆既日食の瞬間だけ 雲が晴れる奇跡

それは二〇〇九年七月のこと。私は皆既日食を観測するツアーの講師役として、参加者を引率して観測のベストポイントである中国の上海に出かけることになっていました。当初の予定では、三〇人のツアーでしたが、旅行会社が募集をかけてみると、なんと六〇〇人も集まってしまったそうです。

あまりに大人数になってしまったために、旅行会社はツアー客を何班かにわけ、大部分の人は私より一足先に上海に出発、向こうで合流することになっていました。

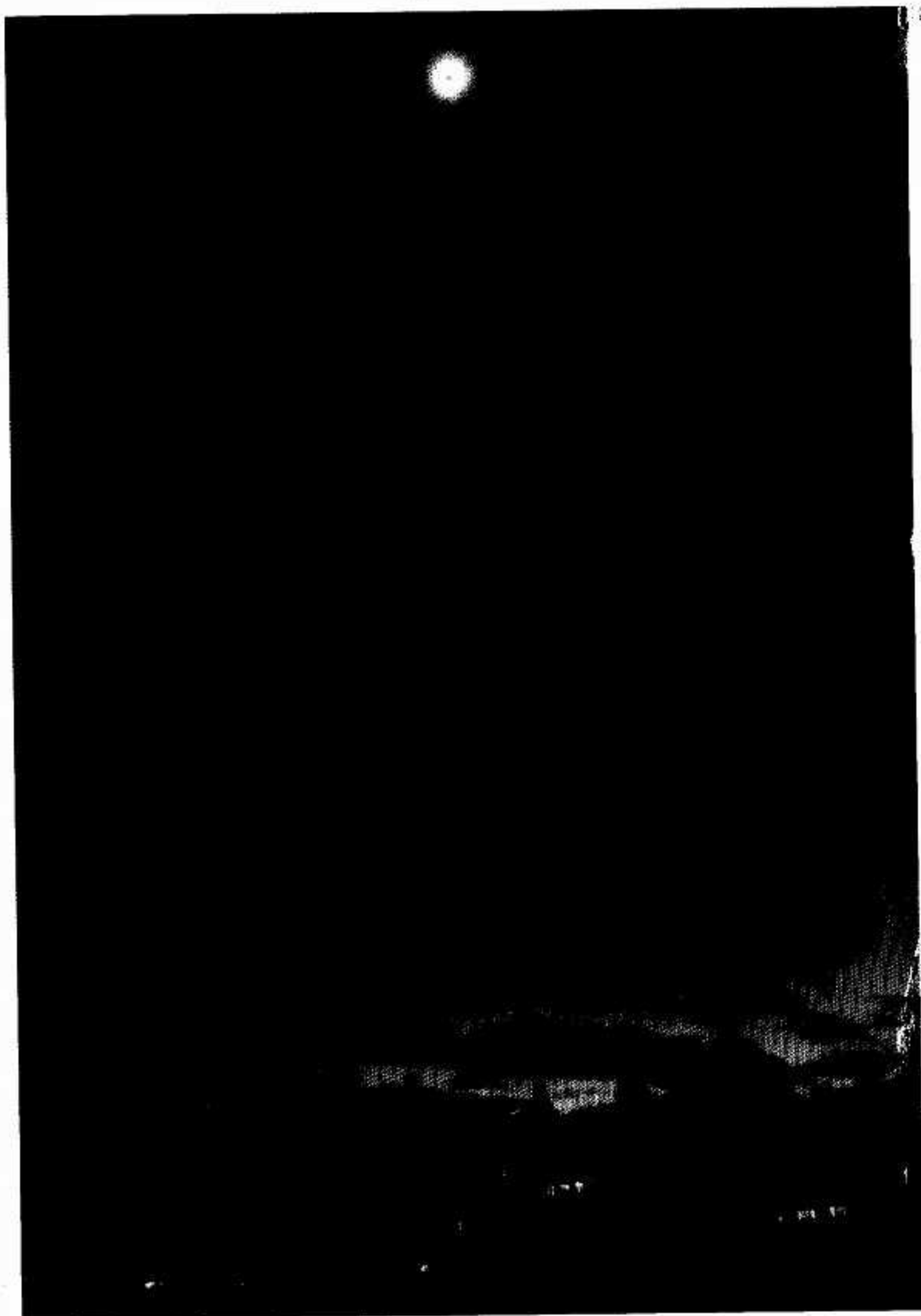
そうとは知らされていなかった私は予定通り羽田空港に集合し、そこから上海に飛びました。羽田で集まったのは六人だけ。私は「これくらい少人数ならやりやすいな」とほっとしたのを覚えています。

ところが、いざ上海に着いてみると、空港で待っていた旅行会社の人から、「先生、じつは六〇〇人もいるんです」とそこで初めて大人数の参加を知らされたわけです。私はもとも気が小さい上に、たいへん人見知りする性格です。六〇〇人の面倒を見なければならぬと知らされたたん、心臓がドキドキして、胃のあたりがシクシクと痛くなってきました。

ツアー参加者は上海まで高い旅費を払って皆既日食を見に来たのに、満足いく結果にならなかったらどうしよう、と私は一人気をもんでいました。

海外旅行の疲れに加え、六〇〇人を引率しなければいけないというストレスが私の体に悪影響を与えたのでしょうか。いま思えば、このときから、少しずつ胃に穴があく胃穿孔こうが始まっていたのかもしれない。

それでも日食前日の下見に行ったときまでは、順調でした。観測会場となるのは上海から西に一〇〇キロほど行った広い公園です。下見に行った日は、雲一つない見事なく



1999年、大好きなモーツァルト生誕の地、オーストリア・ザルツブルグで。
街並の上に広がる皆既日食。

らしい晴天です。

「明日も晴れるといいね」

スタッフの人たちと話し合いながら、ホテルに戻ってきました。ところが夜中に目が覚め窓の外を見ると、土砂降りの雨。おまけにドカン、ドカンと雷まで落ちています。

「これはとんでもないことになったな」と私は思いました。皆既日食を見るために上海までやってきた六〇〇人も人たちのがっかりする顔が目に見えびました。

「なんとか雨がやみますように」祈るような気持ちで、ほとんど眠れないまま朝を迎えました。

しかし無情な雨は朝になってもまったくやむ気配がありません。それでも参加者や旅行会社の人たちは、「先生、やみますよね」「木内先生がいるんだから晴れますよね」と口々にいうのです。

私はますます大きなプレッシャーを抱え込んでしまいました。

会場に到着すると、分散して泊まっているあちらこちらのホテルから参加者たちがバスに乗って集まってきました。

なにしろ総勢六〇〇人ですから、バスの数も半端ではありません。その人たちがバス

から次々降り、皆、かっぱを着て、黙々と会場を目指して行進していくのです。びしょ濡れになったその後ろ姿を見ると、私のせいではありませんが、申し訳なさでいっぱいになりました。

会場にはこの日のためにテントが張られ、軽食なども用意されていました。しかし、まったく盛り上がりません。「木内鶴彦と行く皆既日食ツアー」の旗だけが、雨に濡れて、むなしくはためいていました。

主催者である旅行会社の人たちからは「先生、晴れますよね」と念を押すようにいわれるのですが、私はうなだれるしかありません。

そうこうしているうちに、皆既日食の時間が迫ってきます。解説をするために、旅行会社の人が参加者を集め始めました。

その最中、私はあることに秘かに期待をかけていました。それは会場が大きな川のそばにあったことです。

じつは私はわざわざ川のそばに会場の設営をお願いしていたのです。というのも、皆既日食の際には、太陽が隠れていくにつれ、急激に気温が低下し、川や湖などの水面から水蒸気があがりにくくなるからです。

もし観測地点が雨だったり、曇っていても、日食が近づいてくると、気温低下が起きて、水蒸気の発生や上昇がおさえられます。すると上空の雲に水蒸気の補給ができなくなり、雲が晴れる可能性があるのです。

現に私はオーストリアや南アフリカでの皆既日食ツアーの際にも、川や湖のそばを観測地点に選んで、大成功をおさめたことがあります。

とくにオーストリアでの観測の際には、私が選んだ地点は川が流れる古城の前でしたが、朝からザーザー降りの雨でした。

高原を観測地点に選んだほかのグループからは「先生、山のほうは晴れていますから、いまからでも遅くありません。こちらのバスと一緒に高原に行きませんか？」と再三誘われましたが、私は自分の観測地点を動きませんでした。というのも、私はかねがねヨーロッパの古城を背景に皆既日食の黒い太陽の写真を撮りたいと思っていたからです。

川があるので、もしかしたら、皆既日食のときだけ雲が晴れるのではないかと私は予測していました。

思った通りでした。その瞬間だけ雲が晴れ、私は古城を背景に黒い太陽が写る奇跡的な一枚を撮影することができたのです。

ですから今回のツアーでも私は「雲が晴れる可能性があるな」と思っていました。そこで周辺のスタッフだけにはそっと「私がいるから、もしかしたら晴れるかもしれないね」などと冗談交じりでいっていたのです。

すると、期待どおり皆既日食が近づくにつれて、雨が小降りになってきたのです。太陽が欠けてどんどん暗くなっていき、気温が下がっていくにしたがって、さらに雨がやみ、雲が薄くなっていくのです。

ついには皆既日食の瞬間、太陽のところだけ、ふっと雲が途切れて、きれいな皆既日食が観察できました。そして皆既日食が全部終わったとたん、ふたたび雲がかかって太陽を隠してしまったのです。

まさに奇跡です。「さすが、木内先生！」と皆は大喜びです。私もほっと肩の荷が下りた気がしました。川のそばを観測地点に選んだ私の予測が、まさにぴったりの中しただけです。

それまでずっと緊張が続いていたので、私はしくしくする胃の痛みもすっかり忘れていました。皆既日食が観測できた興奮で、私は自分の体調の悪化に気がつくのが遅れてしまったのです。

○ 心肺停止で運び込まれ、 ふたたび臨死状態に

異変が起きたのは、無事皆既日食の観測を終え、ホテルに戻ったあとです。夕刻からからどうにも腹部に違和感があったのですが、私は緊張のため胃が痛くなっただけだと思っていました。どうやらこのときはもう胃に穴があいて胃穿孔の状態になっていたようです。

その日は激しい胃痛があったので、夕飯をとらずに早く休みました。翌朝、朝食をとろうとして、階下のレストランに向かったときです。

どうにもむかむかと吐き気がおさまりません。これは朝食も無理だと、自分の部屋に戻ろうとしてエレベーターに乗った瞬間です。胃から赤黒い血を一気に吐いて気が遠くなり、腰砕け状態で倒れてしまいました。

そのままエレベーターの中で倒れていると、一緒のツアーの人たちが発見して大騒ぎになりました。すぐさまエレベーターから外にかつぎ出されたのですが、そこでふたた

び吐血をしました。

とにかく大量の吐血で、付き添ってくれた人の話では、全部で五〇〇〇ccくらいは吐血したのではないか、ということでした。

そのまま横たわって救急車が来るのを待っていました。日本と違って、救急車が来るのに時間がかかります。二〇分くらいは待ったでしょうか。その間、どんな体は冷たくなり、意識が薄れていきます。

それでもなんとなく、自分が運ばれていく救急車内の様子を肉体を通してぼんやり見ていた。たぶん心臓はまだ動いていたのでしよう。

でも病院に着いたときは、完全に心肺停止の状態でした。おそらく救急車の中で心臓が止まったのだと思います。二二歳のときの臨死体験同様、肉体から抜け出した意識だけの状態で、私は担架で運ばれる私自身を眺めていました。

すでに私にとっては二度目の臨死体験でしたから、うろたえることはありませんでした。むしろ時空を超えて過去や未来に行ける絶好のチャンスです。こんな機会は二度とありません。

私はすぐさま未来に行こうとしました。前の臨死体験ですと疑問に思っていたこと

を確認したいと思ったからです。

ところが不思議なことに、意識だけの状態になると、頭がものすごくクリアになってしまい、すべてが自明のことに思ってしまうのです。おそらく、臨死状態になって、意識だけの存在になると、すべての情報を含んでいる「膨大な意識体」とアクセスするのではないのでしょうか。そしてすべてが「わかって」しまうのだと思われます。

だから一体何が疑問だったのかがわからなくなってしまった。もっとということさえどうでもよくなってしまいました。

そして前回と同様、近づいてくる大いなる意識体の存在をひたひたと感じました。おそらく人は心臓が停止して、意識だけの状態になると、その状況が飲み込めずに慌てふためいている間に、大いなる膨大な意識体に飲み込まれてしまうのではないのでしょうか。しかし私はどうしても未来に行ってみたいと思いましたので、膨大な意識体に反発するように、未来のことをイメージしてみました。

すると私は未来の日本らしい場所に飛んでいました。そこでは人がMRIの検査時のようなドーナツ型の医療機器に入って、何かの治療を受けていました。その医療とは、どうやら目に見えない波動を使っているようでした。

もっといろいろ見たいと思いましたが、このときは本当にわずかの間で肉体に戻されてしまいました。というのも、私の心臓にはすぐさま電気ショックが与えられ、息を吹き返したからです。

生き返ったのに残念、というのもおかしな話ですが、確実に生き返ることがわかっていながら、もう少し長く臨死状態にあって、もっといろいろ見てきたかったというのが本音です。

すぐさま行われた検査の結果、私の病名は冠静脈破裂だったことがわかりました。胃の下に冠静脈という太い静脈があるのですが、そこに穴があいて破裂し、大量の出血が起きたのです。

私が幸運だったのは、冠静脈が破裂する前に、胃穿孔が起きており、胃にあいていた穴と静脈の血管が破れたところが重なっていて、静脈から噴き出した大量の血液が皆、胃の中に流れたことでした。

そうでなければ、血液は私の腹腔内に溢れてしまい、腹膜炎を起こすところでした。この大量の出血で亡くなってしまう人もいるそうです。私も五〇〇〇ccくらいの吐血をして、心肺停止で病院に運び込まれたのですから、いつ死んでもおかしくない状態だったといえます。

○ 過去に戻って 北斗七星を岩に刻む

最初に運び込まれた上海の病院では破裂した血管の穴を埋めるために、糊のような働きをする大量の薬剤が注射されました。

そのおかげで私はかろうじて命をとりとめ、ほころびた静脈の穴も応急的になんとかふさぐことができました。しかしその病院は地方にある小さな病院でしたので、二週間くらいしてから、上海の西の杭州市にある設備の整った大学病院に転院することになりました。

入院した大学病院では一刻も早く私を日本に帰したかったらしく、大量に穴をふさぐ薬を注射します。この状態で飛行機に乗ったら、また冠静脈が破れて、今度こそ本当に死んでしまったかもしれません。

それでも最初のうち、病院は私を日本に帰そうと躍起になっていました。きっと厄介

な外国人の患者を早く本国に送り返したかったのだと思います。

ところが急に情勢が変わったのでしよう。何か政治的な動きがあったらしく、中国の外務省から連絡が入ったというのです。

「木内鶴彦を中国で死なせてはいけない。なんとか助けなければいけない」ということになったらしく、急ぎよ、中国科学院の医師たちが血管をつなぎ合わせる手術をしてくれることになりました。

中国科学院といえば、中国共産党のトップの人たちを診察する医師のエリート集団です。その医師が私の手術をしてくれるというのですから、ありがたいことです。

なぜ急にそんなことになったのか、事情がよく飲み込めませんでしたが、応急処置のまま日本に帰るより、ずっと安心なので、私は流れに身を任せることにしました。

ところがその手術の直前、私はまたしても危険な状態に陥ってしまいました。手術前の検査をしている最中にふたたび冠静脈が破裂し、大量の吐血と下血に見舞われたからです。このときの吐血量は八〇〇ccにも達したようです。私はショック状態に陥り、ふたたび臨死状態になりました。中国で倒れて二度目の臨死状態です。

意識が肉体を離れて、手術室を俯瞰ふかんしていました。医師と看護師たちが慌てふためい

ているのがはっきり見えます。でも私のほうは、いわば三度目の臨死体験になるので、自分でも慣れたものです。

すぐに蘇生させられてしまうと、また肉体に戻らなければいけませんから、私はさまざま過去に飛ぶことにしました。中国で最初の臨死状態の際には未来を見てきたので、今度は過去に行こうと思ったのです。

今回は行った先々の過去で、私は自分が確かにそこを訪問したという証拠を残してきました。それは北斗七星の形を描いた絵です。その場にいた人間の肉体を借りて、石や岩、建物の柱や壁などに、北斗七星の絵を彫ってきたのです。

なぜ北斗七星だったのかというと、この星は動いていないように見えても、じつは固有の動きをしているからです。北斗七星と北極星との位置関係や形をたどっていくと、時代によって異なった形になっています。現代はひしゃくの形をしています。過去においてはその形が違っていました。もちろん未来でも形は変わります。

そのときの北斗七星と北極星の形を私が訪ねた場所の岩や建物に刻んでくれば、自分がそこにいた証拠になるでしょう。

私は世界各地に飛び、そこで出会ったさまざまな人の体を借りて、北斗七星の証拠を

残してきました。体を借りた人間はその時代の私だったかもしれないし、私の祖先かもしれないし。

とにかくそうやって私はたくさんの証拠を過去に残してきました。しかし、今回もそれほど長く臨死状態のままではられませんでした。優秀な医療スタッフにより、すぐさま蘇生されてしまったからです。

過去に刻んできた北斗七星の証拠はいまはまだ見つかりません。正確な場所も時代も調べようがないので、探す手がかりもありません。でも二二歳のときの臨死体験で和紙に「つる」と記した文字を三六年後に発見したように、何年かあとに私が彫った北斗七星を必ず見つけられると思っています。

いまはその北斗七星を探す旅に出たい気持ちでいっぱいです。

中国語で話しかける医師に 通訳なしで返答する

私の意識が過去に飛んでいる間も、病室では肉体を蘇生させようと、医師や看護師た

ちによる必死の努力が続けられていました。

私は肉体が蘇生するたびに、意識が肉体に戻り、心臓が止まるとまた肉体から離れるということをくり返していました。つまり意識は私の肉体に出たり、入ったりしていたわけです。

その最中、とても不思議なことが起きました。病室で医師たちは中国語で話しています。私は中国語はまったくわからないのですが、医師たちの言葉が日本語と同じようにはっきりと「わかった」のです。

「もうそろそろ危ないな」とか「大使館に連絡したほうがいいかな」などと話す会話の内容が完全に理解できました。意識だけの存在になると、言葉がわかるというより、テレパシーでその人の思いが汲み取れるのかもしれない。

医師たちは私にわからないと思って平気でしゃべっているのですが、私としては「俺はそんなに危ないのか」といっいち会話が心に突き刺さって、さすがに少し心配になってきました。

不思議なことは続きました。病室には中国語がわからない私のために通訳の人が付き添っていたのですが、なんと私が中国語で話しかける医師に、通訳なしで答えていたと

いうのです。

「木内さん、わかりますか？ 大丈夫ですか？」という医師の問いかけに、私は通訳の人なしに即座に「大丈夫です」と答えたのだそうです。

ところが、このときの私の感覚では、医師たちが私のために親切に日本語で話しかけてくれ、私も日本語で答えたのだと思っていました。

ですからあとで通訳の人から「木内さん、どうして中国語がわかるんですか？」と聞かれたときは、私のほうがびっくりしました。

「えっ、俺、全然、中国語なんてわからないよ。勉強したことないし」

「でも木内さん、通訳なしでお医者さんと会話して、ちゃんと答えてましたよ」

「だってあれはお医者さんが日本語で話してくれたからだよ。だから、俺も日本語で答えただよ」

通訳の人と話がかみ合わず、お互いにきょとんとするばかりでした。それにしても不思議なことがあるものです。意識だけとなっていた私は、ミトコンドリア間でのテレパシーを使って互いの意思の疎通を図っていたのでしょう。

もちろん、私の意識が肉体に戻ってからは、膨大な意識体とのつながりが遮断され、

中国語がまったくわからない元の自分に戻っていました。

中国では静脈の血管を縫合する高度な手術を受けました。さらに機能が停止してしまった脾臓ひぞうも同時に摘出しました。私は前から肝臓が悪かったのですが、中国の医師団からは、肝臓が完全に肝不全を起こしているので、生体肝移植しか治療の方法はないと宣告されてしまいました。

こうして一カ月半に及ぶ入院生活を送ったあと、ようやく私は日本に戻ることができました。日本でもう一度検査を受けると、中国では肝移植しか方法がないといわれた肝不全の状態が肝不全の前段階の状態に戻っていたのです。

肝臓は一度悪くなると、それ以上悪くなることはあっても、よくなることはない臓器です。ましてや一度肝不全に陥り、肝移植しか方法がないとまでいわれた重症の肝不全が、その前段階の状態に戻ることはあまりありません。

不思議なこともあるものです。

とにかく、こうして私は一度ならず二度、三度と臨死体験を経験することができたのです。

第三章

「膨大な意識体」と
宇宙が生まれたわけ

○あの世は五次元でできている

臨死体験を経て、私が得たのは膨大な知見でした。一二歳のときは私の頭では整理されず、パンク状態のまま放置していたのですが、「彗星搜索家」として宇宙と向き合ったり、多くの知遇を得て、さらに自分でも勉強を進めるうちに、「あのとき見たあれはこういうことだった」ということが、ジグソーパズルのピースをはめ込むように明らかになっていったのです。

それとともに、ジグソーパズルの全容が少しずつ姿を見せ始めました。なぜ宇宙は誕生して、私たちは生まれたのか。私たちが存在することの意味は何か。私の臨死体験はその答えを知るための旅だったように思います。

これからお話しするのは、私が臨死体験の中で見てきたり、検証してきたさまざまな事実です。しかしあくまでも「私の体験で」という条件が付きまします。ですから現代の科学や物理学の方法で証明せよ、といわれても私にはできません。

私は自分が見てきたことをただお話しするだけしかできないのが、たいへん歯がゆい思いです。その分野で専門的な知識や技術を持つ方々にぜひ私の拙い体験の証明や検証をしていただけたらと思っています。

まず私たちが住んでいるこの世界についてお話しします。私たちは縦、横、高さで構成される三次元の世界で生きています。一次元の世界は点、二次元の世界は縦と横の平面でできています。一次元の世界からは二次元の世界が見えませんが、二次元の世界からは三次元が見えません。

もし私たちが平面だけの二次元の世界に住んでいたなら、「高さ」は見えません。そういう世界があることすら想像できないでしょう。ということは三次元以上の世界があっても、私たちには想像することが難しいということを、まず念頭に置いてください。

とにかく私たちは縦、横、高さの三次元の世界に住んでいます。これは物質の世界といってもいいでしょう。すべての物質は三次元で構成されているからです。

一方で、私たちは「時間」があることを知っています。時間は目に見えない存在ですが、確かに存在しています。

なぜ存在するのかというと、物質が運動するとき、始まりから終わりまで一連の経過

が存在する。その経過が「時間」という概念としてとらえられているからです。

たとえば私が一〇〇メートル走をしたとします。スタート地点にいる私は、ピストルの音で走り出し、一〇メートル、二〇メートルと次々と通過しながら、一〇〇メートル先のゴールに到達します。その経過と変化は「時間」という概念で説明できますが、しかしながら私が走っている間、時間は目に見えません。

目に見えないが、時間はある。したがって、縦、横、高さの三次元の世界に時間を加えた四次元の世界があることまではわかります。これは現代の物理学でも証明されている事実であり、最近では時間を移動する粒子の存在の可能性も発表されているようです。しかし私が臨死体験で経験したのは、三次元でも四次元でもなく、さらにその上の五次元の世界でした。五次元の世界が何で構成されているのかというと、縦、横、高さ、時間に「意識」を加えたものです。

私たちは三次元の世界にいますので、四次元、ましてや五次元の世界を想像するのは至難の業です。でも臨死体験で私が経験したのは三次元や四次元の世界をさらに取り囲む「意識」の存在であり、それが全体のもとになっている五次元としかいいようがない世界でした。その「意識」とは三次元の世界で私たちが感じている自分の「意識」とは違

う、もっと高次元のものです。個々の意識や感覚などどうでもいい。それらを越えた大いなる「我（われ）」という感じ。

三次元の世界の言葉であえて説明するとすれば、「我という空間」とでもいったらいでしょうか。そこには私もあなたも「木内鶴彦」も何もありません。すべてが大きな「我」としてつながって、一つの意識体を構成しています。

その中には過去から未来にいたる生きとし生けるもののあらゆる記憶、経験が集まっているようでした。その意識体を私は勝手に「膨大な意識体」と呼ぶことにしました。ちなみに次元については宇宙には、六次元、九次元、一一次元もあって我々が住んでいる三次元空間のほかの次元は小さくて見えない等々、いろいろな議論がなされています。私自身は多次元空間があることで腑に落ちることも多いのです。

○ 「膨大な意識体」で共有される とてつもない情報

人は死に際して、まずはトンネルや光、お花畑など第一次臨死体験を経験します。こ

れらは前にも説明した通り、脳内の生体反応によるものだと思います。そして心臓が停止し、意識が肉体と離れる第二次臨死体験の状態になったとき、この「膨大な意識体」の存在を感じるのです。

「膨大な意識体」の正体が何であるのか、私には見当もつきません。しかしどこか懐かしい感覚もありました。おそらく人は「膨大な意識体」から生まれてきて、ふたたび「膨大な意識体」に戻るのではないのでしょうか。

二次臨死状態になり、肉体から意識が離れたとき、私はこの「膨大な意識体」の存在をごく身近に感じました。

私がまごまごしていたら、きっとすぐに私は「膨大な意識体」に吸収されていたのだと思います。しかし私は吸収されまいと、その存在に反発しました。もっと正確にいうと、「木内鶴彦」という意識を持ったまま、「膨大な意識体」にアクセスし、情報を得ようとしたのです。

過去を見たい、未来に行きたいという私の強い意識が「膨大な意識体」に吸収されることなく、必要な情報を引き出したのだと思われます。

アクセスしたときの感覚としては、私が「木内鶴彦」のまま「膨大な意識体」の中を

通り抜けるというイメージです。

その瞬間、私は「膨大な意識体」に保管されているあらゆる情報を一瞬にして共有することができました。ちょうど「木内鶴彦」というPC端末が「膨大な意識体」というスーパーコンピューターに接続し、スーパーコンピューターが持っているすべての情報が一気に流れ込んだといってもいいでしょう。

そこにはあらゆる生命が生まれてから死ぬまでに得た情報はもちろん、宇宙誕生から終焉にいたる莫大な情報が記憶されていました。私たちが死ぬと、私たちが生きている間に経験した情報はすべてこの「膨大な意識体」に吸収されるというわけです。そして私自身の意識も吸収されて、大きな「我」になってしまう。

しかし私は幸運にもそれに吸収される前に、「木内鶴彦」という意識を維持したまま、宇宙誕生から終焉にいたるまでの情報を共有し、ふたたび生き返ってきたのです。

私が過去や未来に一瞬にして移動できたと感じたのも、「膨大な意識体」の中ですべての情報はつながっていたからです。便宜上、私は「未来に移動した」とか「過去に旅してきた」という言葉を使いますが、正確にいうとそうではありません。

「膨大な意識体」と一体になり、その中の情報に触れたという表現のほうが正しいかも

しません。

これらのことを私は頭で理解したわけではありません。「膨大な意識体」にアクセスして、その中を通り抜けた瞬間、瞬時にしてすべてのことがわかってしまったのです。

○ 宇宙は「膨大な意識体」の ひずみから生まれた

私たちのふるさとは「膨大な意識体」です。そこから私「木内鶴彦」は生まれてきて、やがてまた「膨大な意識体」に戻っていきます。

では、私たちはどのようにして生まれてきたのでしょうか。

二二歳の臨死体験の際、私はその答えである宇宙の始まりを見た気がしました。そのときはあまりに情報量が多すぎて、頭の中がパニックになり、理解ができなかったのですが、その後、自分でも宇宙について勉強し、さらに中国で二度目の臨死体験を経験したことで、ある程度の確信が得られたのです。

それはこういうことです。

「膨大な意識体」があるのは五次元の世界です。その様子は、三次元の言葉で表すなら、空間ともいえますし、ガスのような存在ともいえます。五次元の世界ではすべてを「膨大な意識体」が満たしており、バランスがとれた完全な世界をつくっています。

しかしそこはあまりに完全で、均衡がとれた世界なので、「無」といってもいいでしょう。まったく動きも揺らぎもありません。その中に入ると、私は退屈さに支配される感覚を覚えました。しかし完璧に見える五次元の世界でもときどきひずみが生じるのです。「誰がひずみをつくるのか」という主語は、この際存在しません。「誰が」という「個」は「膨大な意識体」に満たされた世界では存在しないからです。しかし、「なぜ」ひずみが生まれたのかという理由は存在するかもしれません。

その理由については、私は長らく考えてきました。そしておそらくこういうことなのではないか、と思っています。

「膨大な意識体」がある五次元の世界は、完璧ですが、同時に無でもあります。どこまでも無でしかない世界は、私を感じたようにひじょうにつまらない退屈な世界です。そこにひずみが生まれると、空間が動きます。空間はひずみのない元の形に戻ろうとしますので、ひずみが揺らぎ、だんだん解消に向かいます。そして完全にフラットにな

ったとき、元の五次元の空間に戻るわけです。

ひずみができてから、五次元に戻るまでの間が三次元の世界です。つまり三次元の世界は五次元の世界に変化を与え、波立たせるために生まれているのではないのでしょうか。「何のために」かは私にもわかりません。私たちがそうであるように、五次元の世界でも変化という楽しさを求めているのかもしれない。

苦勞も悩みも障害もないフラットな人生は退屈ともいえます。暇な人は必ず変化を求めたくなります。あえて苦しいマラソンや登山、危険なスポーツに挑戦する人がいるのも、変化や困難を楽しみたいからです。

五次元の空間にひずみが生まれるのも、あえてひずみをつくって空間を波立たせる。退屈しのぎにそんなことが行われているのかもしれない。

● 死は意識が形を変えるだけのこと。 恐れることではない

とにかく五次元の世界で「膨大な意識体」の中に、あるときひずみが生まれました。

そしてそのひずみを解消するため、空間に動きが生じたのです。

その動きは回転する渦のように見えました。回転運動が始まると、渦の中にさらに小さな渦がたくさん生まれます。そしてそれぞれの渦の中に小さな粒子が集まり始めたのです。これらはもしかしたら水素元素ではないかと私は思います。洗濯機を回すと、渦の中心に糸くずやゴミが集まってくる、あんな感じです。

そうした渦がたくさん現れ、全体に広がりますと、そのうち渦同士が互いに引きつけ合って、吸着するようになります。ちょうど石鹸の泡がくっついていくような感じがします。

その中では、水素元素が激しくくっつき合ってガス状の塊を形成していました。そして泡同士がどんどんくっついて、大きな塊になり、ある限界を超えたとき、大爆発が起きたのです。

それがいわゆるビッグバンだったのだと思います。そしてビッグバンによる大爆発によって、さらに小さなひずみがあちこちに無数に生まれ、渦が出現して、粒子を集め、塊になって爆発するというくり返しが起きたのです。

そのぶつかり合いの中から鉱物が生まれ、星などの物質が形成されていったのではな

いでしょうか。

ですから宇宙はビッグバンから始まったのではなく、最初は空間のひずみから始まり、大爆発を起こしたのだと思います。私は宇宙の始まりはずっとビッグバンだと教わってきましたから、これには驚きました。

この話は、天文学をかじった私でさえ、なかなか理解しにくいことでしたので、ましてや世間の方たちに話すときは苦労します。

そこでわかりやすいように、こんな説明をしています。

宇宙の最初は五次元という空間でした。空間は「意識」というガスのようなもので満たされています。そのガスがひずみを起こすことで、大きな渦が生まれ、爆発して物質ができました。つまり「意識体」が変化して物質が生まれたという説明です。

水蒸気が冷えて水になったり、氷になったり、雪になる。それと同じように、「意識体」が変化して、三次元のいろいろな物質が生まれたのです。

この説明だと、物質がなくなるとき、「膨大な意識体」に戻るという理屈もスムーズに納得できます。

雪や氷や水の形（＝肉体）をしていた私たちは、死んで目に見えない水蒸気（＝意識）

になり、空間を満たす。死は意識が形を変えるだけのことです。怖いことでもなんでもないというわけです。



輪廻転生や前世の記憶は ひずみによってもたらされる

さらにつけ加えておきますと、私が臨死状態のとき、なぜ「膨大な意識体」に吸収されないで、「木内鶴彦」のまま情報にアクセスできたのかというと、やはり知らない間に「ひずみ」を利用していたからです。

心肺停止になり、意識が肉体から離れたとき、私は自分の意識を過去や未来に飛ばしてしまいました。そうやって意識を「いま」からずらしたために、意識の空間に微妙なひずみが生まれたのです。

そのひずみを利用して、私は「木内鶴彦」という意識のまま「膨大な意識体」の中を旅することができました。ひずみの存在が、五次元の中にあっても三次元の物質がそのままであることを保証するキーワードになっているわけです。

ですから皆さんがもし臨死体験になったら、自分の意識を一日、二日でも過去に戻したり、未来のことを想像してみたいと思います。すると空間にひずみができるので、自分という意識を持ったまま、過去や未来に行くことができます。

もつとも、だからといって生き返るという保証はありません。未来に飛んで、自分の肉体がそこになれば、残念ながら自分という肉体は死んでいることになります。しかしがっかりすることはありません。自分の肉体はなくなっても、他人の肉体を借りることはできるからです。

最初の臨死体験のとき、私が父の体に入り込んで、「大丈夫だよ」といったことや、過去の人の体を借りて「つる」という文字を残したことから、すでにある肉体に、一時的にはありますが、入ることができます。

また未来に行って、新しい生命体に入ることができるようです。ただしそれはまだ胎児の状態で、脳細胞が完成されていない生命体にかぎります。

私も未来に飛んだときに、新しい生命体に入ろうと試みたことがありますが、私の場合は自分の肉体が生き返ることがわかっていましたので、新しい生命体の肉体から激しく拒否されてしまいました。

でも、もし自分の肉体が確実に死んでしまうのなら、「自分」という意識の、ひずみを持つまま、未来において新しい生命に生まれ変わることは可能なようです。ただし、新しい生命体に入ったとたん、記憶は一度リセットされてしまうので、何も覚えていない状態になります。

そのまま赤ん坊として誕生し、成長していくわけですが、このときひずみが潜在的な記憶としてよみがえってくるだろうと想像できます。

たとえば火事で亡くなった人の意識が入った人は、なぜだかわかりませんが、生まれつき火が怖いということもあるでしょう。南の海の島で生きた人は、旅行で南の島に行ったとき、そこが初めての場所であるにもかかわらず、「前に来たことがある！」という強烈な懐かしさを覚えると思います。

チベットで生まれ変わりが信じられているのも、ひずみがインストールした記憶を持つて生まれてくる子どもがいるからです。

ダライ・ラマが生まれ変わりだというのも、まったく根拠がない話ではありません。もつとも、多くの人たちは自分が臨死状態になったとき、私のように過去や未来に意識をずらそうなどという発想をしないはずですから、たいていはそのまま「膨大な意識

体」に吸収されてしまいます。

もう一ついっておくと、「私」という意識体は、いまここにいる「私」だけではないかもしれません。というのは五次元の世界に生まれたひずみは一つだけではなかったからです。

私は同じようなひずみがあちこちに生まれているのを感じました。それぞれのひずみで渦ができて、物質が生まれ、三次元の世界が誕生していることは十分考えられます。おそらく私たちの三次元の世界とよく似ていても、じつは違う三次元の世界が同時に存在しているのではないのでしょうか。

「パラレルワールド」という言葉を耳にしたことがありますでしょうか？

我々の住む世界と同じ次元を持ちながら、平行して存在する別の世界、平行世界や平行宇宙などと呼ばれるものです。

そして時空のわずかなずれによって、私たちの世界ではなく同時に存在している別の世界に入ってしまうことも理論的にはあり得ます。

ですからたまに自分とそっくりの人が歩いていたり、自分が同時に別の場所で存在していることもあるかもしれません。昔からある神隠しなども、時空のずれから別の世界

へ入り込んでしまったのではないのでしょうか。
ひずみ同士が接している場所では、そんなことも起きている可能性があります。

第四章

宇宙の誕生で 見えてきた世界

惑星は太陽が収縮するたびに 産み落とされた塊だった

宇宙の誕生がわかったので、私は太陽系や地球がどうしてできたのか見てみようと思いました。そこで、太陽が生まれた頃の情報にアクセスしてみました。

太陽は最初は青白い大きなガスの塊でした。水素ガスの巨大な渦がものすごい勢いでくっつき合い、高熱を発していました。あまりにエネルギーが高すぎて、最初は青白く光って見えるくらいでした。それがそのうち冷えて赤いガスに変わっていききました。

よく宇宙空間で赤いガスの星雲が発見されます。あれはたいていは鉄分を多く含むガスの塊です。ガスの渦が回転しているうちに、鉄のような重い物質が中心部に集まり、赤く見える星雲をつくったのです。

太陽の場合も重い鉄などの物質が集まって、真っ赤なガス状の巨大な塊を形成しました。そしてさらに大きくなって自分の重さで臨界量を超えてしまうと、回転運動を始めたのです。

そのあとが面白いのですが、回転しているうちに回転速度が速まり、その速度によって太陽が収縮してきたのです。持っているエネルギーは同じなのに、容積だけが縮んできたわけです。

すると何が起きるのかというと、太陽の外側に鉄分を多く含むガスの塊が取り残されて、それがまた回転しながら徐々に冷却されて星ができるのです。つまり子どもの惑星が生まれるというわけです。

そして太陽からの距離によって、さまざまな性質を持つ惑星が誕生していききました。太陽に近ければ近いほど、鉄分の多い赤くて重い惑星になります。たとえば火星は鉄のガスの塊になっていて、内側のほうまで鉄が凝縮して冷えているので、硬い殻ができます。

太陽から遠い木星はまだガスが集まって回転しているだけで、殻ができていません。地球はというと、表面だけしか冷えておらず、中はドロドロの溶岩のようなマントル対流が流れています。火星のように中まで固まっていないので、地殻はマントル対流の表面に浮いている薄皮のような状態です。

熱した牛乳には表面に薄い膜が張ります。地球の地面はあんな感じと想像してみて下

さい。ですから地球の地面はひじょうに流動的です。これからまだいろいろなことが起きるに違いありません。

たとえば大きな惑星が近づいてくると、その重力に引き寄せられて、薄皮の大陸がぐにやりと動いてしまうでしょう。大規模な大陸移動などもあるかもしれません。

私は知り合いの天文家には、「冗談で「今度は死んでから、じっくり観測しようね」といっています。それならば、長く観測ができるでしょう。生きている間だと、寿命の分しか天体観測ができません。「早く死んで、好きなだけ天体観測するのが夢です」と、おかしなことをいって、人から怪訝けげんがられることもあります。

こんなふうには太陽系の惑星は太陽が収縮するたびに、生み出された太陽の子どもの惑星です。そして太陽に一番近い水星が一番新しくできた惑星というわけです。

私の説は最初には誰にも相手にされませんでした。でもそれを裏付ける証拠が最近発見されました。なんと太陽のすぐ近くに新しい惑星ができて始めているのです。

まだ太陽のごく近く、ほとんどガスの中にあるので、惑星という定義にはなっていないが、太陽がもう少し収縮すると、惑星として姿を現すはずです。そうなれば、これが水星よりも一番新しい惑星の誕生になるでしょう。

私が臨死体験で見てきたこととよく似たことが実際に起きています。「やっぱり、私が見た太陽系の始まりは正解だったんだ」と私はますます確信を深めています。



電子のスパークが アミノ酸を生命に変える

さてここからが地球についての考察です。太陽系の惑星が、回転する太陽のガスの中から生まれたものだとすると、太陽の中では物質の核が激しくくっついたり、破壊されたりをくり返しながら、だんだんに惑星のもとである重い物質の塊を形成していったと考えられます。

つまり核分裂や核融合によって惑星ができていくのですから、初期の惑星には放射性物質がひじょうに多いわけです。地球ができたときも、この星は放射線が飛び交う放射性物質の塊だったに違いありません。その地球に水やアミノ酸などの高分子を含む彗星がぶつかって、生命のもとがもたらされました。

ちなみに彗星とは、宇宙空間を漂う塵や水分（氷）が雪だるまのように固まったもの

です。太陽の重力によって引き寄せられ、さまざまな軌道を描いて回っています。この彗星が惑星と違うのは、惑星が鉄などの鉱物のガスやガスが固まったものでできているのに対して、彗星のほうは主成分が水や氷、塵だということです。

初期の地球は、彗星によってもたらされた氷が溶けて、海になり、その中にアミノ酸や地中から流れ込んだナトリウムなどのミネラルが豊富に溶けていたと考えられます。すなわち電気を通しやすい電解液の海ができあがったというわけです。

しかしその海でアミノ酸が生命に変わるためには、何かきっかけになるような刺激が必要だったはずです。そのきっかけが何だったのか、いま世界中の科学者が血眼になって研究しているところですが、私が臨死体験で見てきたのは、電子的なスパーク（刺激）でした。

電解液の海に雷のようなスパークが見えたのです。ですから、もしいま生命の誕生を研究している研究者の方がおられたら、アミノ酸など生命のもととなる電解液に電子的な刺激を与える実験を試みてみたらいかかかと思っています。

私は専門家ではありませんので、自分が臨死体験で見てきたアイデアを話すことしかできませんが、挑戦してみる価値はあるのではないのでしょうか。

電子的な刺激が生命を誕生させたとなれば私が考える根拠はこうです。

すべての物質は原子と呼ばれる小さな粒子でできています。そして原子は原子核とその周囲を回る電子で構成されています。

それらの原子がくっついて分子となり、さらに分子が結合し合って、さまざまな物質が形づくられていくわけです。そこに電子的な刺激を与えると、安定していた原子核と電子の構成が崩れ、不安定な世界が生まれます。

私が思うには、五次元の世界のひずみによって三次元の物質の世界ができたように、電子的なスパークにより電子のゆがみが生じて、そのゆがみから生命が生まれたのではないのでしょうか。単なる物質にすぎないアミノ酸に生命を与えたのは、電子のスパークというゆがみだったというわけです。

ではその電子的なスパークを起こさせたものは何だったのでしょうか。私は放射線だっただと思います。

初期の地球は放射性物質の塊でした。放射性物質からはつねに放射線が放出されています。その放射線がアミノ酸に電子的なゆがみを与えるスパークになったのではないかと思います。

放射線は電子エネルギーでもあり、その放射線が発生することにより弱い磁界が発生して生命反応が促進された……つまり、放射性物質から発生する放射線をエネルギーとして生命体が生まれたのではないのでしょうか。

細胞に強い刺激を与えると、万能細胞などに変化するという実験もあるようですから、生命のもとであるアミノ酸に放射能という良い刺激が加えられたら、突然変異的な変化が起きて、生命が誕生することは十分考えられます。

しかし問題はその後です。生命は生命活動を維持するために、エネルギー（栄養）が必要です。初期の地球に、果たしてえさと呼べるようなものがあつたのでしょうか。何もありません。あるのは放射能だけ。私はそこに注目しました。初期の地球上の生命は放射線をえさとしていたのではないかと考えたのです。

● 原始の地球では 放射線をえさとする生命があつた

エネルギーというと、私たちは食べ物を想像します。しかしエネルギーの正体は電気

です。電気エネルギーがないと細胞は自らを維持していくことができません。

なぜならいまも説明したように、細胞も含め、すべての物質は原子核と電子からなる原子でできています。そして原子が安定した状態を保つためには、つねに電子を引きつけておく電氣的なエネルギーが必要だからです。

物質は基本的に変化しないので、原子核と電子の状態が安定していて、バランスがとれています。だから安定しているともいえます。

一方、細胞は成長したり、分裂したり、増殖したり、つねに変化しています。そのため、電気エネルギーを取り込んで最適な状態でバランスをとり、電子を安定させておく必要があります。

かりに細胞が最適な電気エネルギーを確保できないと、電子は勝手に原子核から離れて飛んでいってしまいます。原子は壊れ、細胞は破壊されてしまうのです。

電気エネルギーが必要な理由はそれだけではありません。電気による発熱作用は生体内でさまざまな化学反応を促します。それが細胞膜をつくったり、細胞に必要な物質をつくり出したりします。

放射性物質の塊だった初期の地球で誕生した生物は、生命維持に必要な電気エネルギー

ーを取り込むために、放射性物質から放出される放射線を利用していたのだと思います。でもそんなことが可能でしょうか。

放射線とは高いエネルギーをもって流れる電子のエネルギーのことです。大規模な核分裂や核融合の際に放り出された大量の電子が高速で飛び回っているのが放射線です。放射線を浴びると生物が死んでしまうのは、安定していた原子核と電子の間に、よけいな電子エネルギーが入り込むことによって過電流になり、細胞が破壊されたり、異常な増殖が始まるからです。

逆のことをいうと、がんのように細胞が異常に増えてしまう状態は、電子エネルギーが多すぎるわけですから、どこかで放電してやればいいということになります。

つまり放射線はそれ自体が電子のエネルギー体だといえます。ですから最初の生命は放射線から上手に電子エネルギーを取り込んで、それを電気エネルギーに変え、生命活動に消費したり、細胞分裂する際に原子を安定させるために使うことができたのではないのでしょうか。

そして生命活動が終わりに近づき、電子エネルギーが取り込めなくなると、原子を安定して維持できなくなって死んでしまう。細胞はばらけてしまい、今度はそれを栄養素

とする新しい生命が現われるという流れになっていったのだと推測されます。

私のこの説を裏付けるような生き物も存在しています。光合成細菌という嫌気性（酸素を嫌う性質のこと）の細菌は放射線を吸着して除去しています。また広島での原爆投下の際、植物学者は「いままで見たことがない植物が生えてきた」という証言をしています。地球上には放射線をえさとする生き物がまだいるということです。

ですから、私は放射線の除去に放射線をえさとする光合成細菌を使ったらいいと思います。実際、光合成細菌である藻の一種を使うことも検討されたと聞きました。でもそれらは一定レベルまで行くと効果がなくなると報告され、使用が見送られたそうです。私にいわせれば、効果がなくなったのは菌が増えすぎて飽和状態になり、死んでしまったからです。

そうならないよう、人間がうまく調整してやることはできないものでしょうか。

さて、原始の地球では、放射線を栄養素とする細胞が誕生しました。それらは地球上から放射性物質がなくなるまで隆盛を極めたのでしょう。しかし栄養源である放射線がなくなると滅亡してしまいます。

その死体をえさとしていた細胞も、やがてえさがなくなると、エネルギー源を失いま

す。そこでその中から二酸化炭素と光合成によってエネルギーをつくり出す新しいタイプの生命、藻の仲間が生まれたのです。

植物が光合成を獲得したのは劇的なことでした。なぜなら光合成の過程で酸素が生まれたからです。植物がつくった酸素を使って、今度は動物が生まれました。動物は呼吸によって二酸化炭素を排出します。植物はそれを使って光合成を行い、酸素をつくるという絶妙な循環のバランスがこうして生まれたわけです。

つまり地球という星は、生体反応の連鎖によって、好気性（酸素を好む性質のこと）の生命が住みにくい環境から住みやすい環境に変化していったのだと考えられます。生命は放射性物質の塊だった地球をきれいにするために生まれてきた存在だといえます。

意識は

ミトコンドリアの中に存在する

アミノ酸に電子的なスパークが加わって誕生した初期の生命は、生命ではありませんが、物質に近いものでした。単細胞で動き、単細胞で死んでいく。そこに細胞同士の連

携や情報交換は必要なかったからです。

しかしミトコンドリアが登場すると、生命は複雑な進化を遂げるようになります。

ミトコンドリアは初期の細胞が誕生した頃、その生命と共生していた好気性の細菌だったといわれています。つまりミトコンドリアは、外からやってきた存在です。細胞が単細胞から多細胞に進化する際に、細胞内に取り込まれ、細胞の生命活動を助ける働きをするようになりました。

ミトコンドリアの重要な働きはエネルギーの創出と情報伝達です。まずエネルギーに関与というと、細胞内に運び込まれた酸素はミトコンドリアによって糖や脂肪と結びつき、熱量となります。ミトコンドリアは生体活動に欠かせないエネルギーをつくっているのです。

またミトコンドリアは情報伝達にも深く関わっています。単細胞から多細胞へと生命が進化するとき欠かせないのが情報です。なぜなら細胞同士がくっついて多細胞になり、一つの生き物をつくるには、細胞間で情報を伝達し、どのような結びつき方をするのかを伝え合わなければならないからです。ミトコンドリアは情報伝達をコントロールする役割も果たしています。

細胞の外からやってきた存在なのに、細胞内にあって、細胞をコントロールする。いわば細胞を支配する存在といってもかまいません。

なぜミトコンドリアにそんな力があるのか。私は大胆な仮説を立ててみました。ミトコンドリアこそが「膨大な意識体」につながるものであり、私たちの意識をつなぐもの、私たちが「膨大な意識体」からやってきた証拠なのではないかという仮説です。つまり私たちの意識はミトコンドリアにあるのです。

そう考えると、とてもすっきりします。細胞は細胞同士、情報交換しなければ、生命体を構成できません。一つの細胞からいくつもの細胞にわかれるとき、この細胞は体の中の「ここ」になり、この細胞は「こんな集合体」になる、という情報交換がなければ、とても複雑な機能を持った生命体はつくれないでしょう。

しかもたった一つの細胞から分裂して、それをつくりあげなければいけないのです。その情報は一体どこから得ているのでしょうか。

もしミトコンドリアが「膨大な意識体」が形を変えたものであれば、ミトコンドリアは「意識」ですから、お互いがテレパシーのようにつながっていて、情報が共有され、交換されるのは当然です。だからたった一つの細胞から人間のような複雑な生命体をつ

くることができなのです。

それぞれの細胞のミトコンドリアが情報のやりとりをしながら合成されたものが、私たちのいまの体です。そして脳はミトコンドリアから提供された情報をしまっておいたり、演算したり、計算処理をして、体の各部署に命令を飛ばすところに過ぎません。だから脳に心はありません。意識もありません。

私が臨死状態のとき、脳波は停止していたにもかかわらず、頭がパンクするほど大量の情報を得ていたことから、脳に心や意識がないことがわかります。

心は全部の細胞の集合体です。もっと詳しくいうとミトコンドリアの集合体です。私たちの心や意識はミトコンドリアの集合意識なのです。

そして私たちがそれぞれ違った意識、個性、性質、役割、考えを持つのも、ミトコンドリアの集合意識だと考えれば納得できます。ミトコンドリアが三つあれば、三つの集合意識、一〇〇個あれば一〇〇個の集合意識になります。

一人ひとり細胞の数も様相もすべて異なりますから、その集合意識である私たち全員が異なる意識や個性を持つのは当然といえましょう。

ミトコンドリアが「膨大な意識体」とつながっているとすると、理屈の上では、ミト

コンドリアを通して、自分以外の他人とつながることはもちろん、時空を超えてよその天体からの情報をもらうこともできるはずで。過去や未来とつながることもできるでしょう。

現実には宇宙人とやりとりしている人もいるかもしれないと私は思います。あるいはよその天体から情報を飛ばしている可能性もあります。私たちが鈍感になっていて、情報を受け取れないだけで、私たちのミトコンドリアの中にはちゃんと情報を受け取っているものもあるかもしれません。

それらのミトコンドリアが、あるときは直感として、あるときは夢という形で、宇宙からの情報を伝えたとしてまったく不思議ではないと私は思っています。



二万五〇〇〇年前まで 地球には月はなかった

中国での臨死体験の最中、私は地球で生命が誕生したときまでさかのぼってみました。放射線のスパークが起きたり、放射線をえさとする生命体が生まれたり、単細胞から多

細胞へ生命が進化していく様子を見てきたのですが、そのとき記憶がよみがえったのは、二二歳のときの臨死体験で垣間見た原始の地球には月がなかったということです。

私は星の観測を専門にやっているので、どうしても月の存在が気になります。というのも、月の成立にはいろいろな説があつて、太陽系ができたときに地球の兄弟星として一緒にできたという説や、地球から分離して生まれたという説、惑星が地球の引力に引き寄せられて月になったという説などがあつて、いまだにどれが正しいのか、結論が出ていないのです。

二二歳の臨死体験のときも私は過去に戻って、月の存在を確認しました。すると、かつての地球には月がなかったのです。それどころか、月ができたのはつい最近、いまから一五〇〇〇年ほど前になるようです。月がない時代、地球の大陸はいまよりずっと大きく、海は地球の三分の一くらいしかありませんでした。

当時、人間はすでに高度な文明を築いていました。地球の環境を破壊しないよう、自然と共生しながら知恵と哲学と技術を持って暮らしていました。

ところがいまから一五〇〇〇年前に巨大彗星が太陽に近づくという恐ろしいことが起きました。巨大彗星の内部には圧力によって結晶化された大量の水や氷がたくわえら

れていました。それが太陽の熱で一気に溶かされたために、莫大な水蒸気が発生したのです。地球の軌道がそこに近づいたとき、気化した水蒸気は地球の引力に引っ張られ、大量の水分が地上に降り注ぐことになりました。

地上の多くは海の中に沈み、高度な文明も滅びてしまいました。アトランティス大陸の消失やノアの大洪水などの伝承が残っているのも、このときの洪水が物語として伝えられているからではないでしょうか。

そして軽くなった巨大彗星は軽石のような塊となり、地球の重力に引っ張られて、地球の周りを周回する衛星になったのです。それが月の正体です。

月は地球の環境を激変させ、多くの生命を滅ぼした巨大彗星の名残だったわけですが、しかし、もともとの地球には月はなかったという私の説はなかなか信じてもらえませんでした。そこで私はいくつか証明する手がかりを示すようにしています。

たとえば動物が持っている体内時計がその一つです。太陽がのぼってきて沈み、またのぼるまでの周期を一日といいます。時間でいえば二四時間です。

しかし、人間も含め、地球上のすべての生き物が持っている体内時計はみな二五時間です。なぜでしょうか。そこで私はもし月が存在せず、地球が月の引力の影響を受けな

かったら、一日は何時間になるのか計算してみました。するとちょうど二五時間になりました。生き物が持っている体内時計と見事に一致します。

このことから、地球の一日は長らく二五時間だったのではないかと推測できます。

また地球上で、月の通り道にあたる白道はくしう（太陽の通り道は赤道）上に砂漠が点在しているのも偶然とはいえません。月の軌道上では、大量の水が降り注いだに違いありません。石や岩は細かく砕け、山は平坦になり、木々はなくなって、砂漠になってしまいました。だから月の軌道上に転々と大洪水のあとの砂漠が点在しているわけです。

さらに決定的な事実があります。地球上に存在した巨大な恐竜たちの存在です。もし地球がいまと同じ質量を持っていたとしたら、重力は質量に比例しますから、あの巨大な恐竜たちは自らの重量によって歩くこともままならなかったはずです。

ティラノサウルスを例にとると、いまの地球の重力なら時速一五キロで歩くのが精一杯だったでしょう。ところが、さまざまな検証からティラノサウルスは時速六〇キロ以上の速度で移動し、獲物をしとめていたといわれています。

なぜあれだけの巨体で、そんなスピードが出せたのでしょうか。それは地球の質量がいまよりずっと軽かったからです。なぜ地球の質量は軽かったのか。そしてなぜいまは

質量は重くなって、昔より重力が増えてしまったのか。

その原因が何だったのかというと、地球上で海が増えたことしか考えられません。つまり月の出現による大洪水によって、地球の三分の二は海になってしまい、その分の水の質量が、地球を重くした原因になったのです。

そこで私は月が失っただろう水分量と地球の質量から計算して、地球で増えた水分量を計算してみました。するとこれも見事に一致しました。大洪水の犯人は月であり、その月はいまから一万五〇〇〇年前に突如として現れたのです。

● 月を見ると、 すべての生物は不安になる

月がない時代、女性の生理現象は年に一回だけだったと考えられます。というのは、地球は一年かけて太陽の周囲を回りますが、このとき、射手座方向から来る巨大なエネルギーをもっとも多く受ける日に、体に変調をきたすからです。

射手座というのは、私たちがいる銀河系の中心です。銀河系は射手座あたりを中心に

大きな渦を巻いています。宇宙にはさまざまなエネルギーが飛び交っていますが、渦の中心から放出されるエネルギーが一番強いのです。

銀河系の場合は、それが射手座方向ということになります。そして一年に一回、射手座からのエネルギーの影響を一番多く受ける日に、女性は体調が変化し、不安にかられます。生き物は不安や恐怖を感じると、本能的に子孫を残そうとします。それが女性の生理となるわけです。

ところが月ができてからは、地球に近い月からのエネルギーによる影響が強く現れるようになりました。月は二八日の周期で地球の周りを一周します。すると月のエネルギーがもっとも強くなる満月や新月の日に、人間は何ともいえない不安に襲われるのです。おそらく月の引力に引っ張られる恐怖心を覚えて、心がざわつくのでしょう。

女性の生理も年一回から、月一回に変わりました。それまでは年一回だったものが月ができてからは、毎月一回、不安感から情緒不安定になったり、イライラするようになったわけです。交通事故が満月の前後に多いことや犯罪が活発になるのも、月と無関係ではないと思います。

月の影響を受けるのは人間だけではありません。サンゴなど海の生き物も満月のあと

産卵します。ネコに急にさかりがつくのも満月や新月のときが多いようです。動物たちの異常行動は、その多くが満月や新月のとき起こります。人間同様、月の引力が生き物に恐怖心を与えて、子孫を残そうとする本能を刺激するのでしょう。

さらにいえば、地球自体も月の影響を受けているふしがあります。私が調べた範囲では、地震が起きるのも満月にさしかかったときや新月から戻りつつあるときに多く見られます。

おそらく満月や新月に近づくにつれ、月から受けるエネルギーが強くなり、地球がそれを受信することで、地球も生命のエネルギーも活発になるのではないかと思います。そのエネルギーを放出するために、地震や火山活動が活発になるのです。

実際、地震や火山の爆発は満月の前や新月のあとが多いのですが、それはもっとも月のエネルギーが高くなる前に、先行して地球のエネルギー放出が起きるからではないでしょうか。

このように月の出現は、地球上の生き物や人間、そして地球自身にも大きな影響をもたらしたのです。



人間は自ら テレパシーの回線を遮断した

月の出現というインパクトによって地球の環境はダイナミックに変わってしまいました。月の重力によって地軸が傾き、地球の一日は二五時間から二四時間になりました。地球の三分の二は海に覆われてしまい、地球の重力も変化しました。

さらに大洪水により、多くの生命が絶滅し、高度な文明を築いていた人間もほとんど死んでしまいました。残された生き物は人間も含めて少なくなった食べ物をめぐって殺し合いを始めます。弱肉強食の時代が始まったのです。

このとき人間が失ったのはテレパシーの能力です。私は大洪水の前までは人間もお互いのミトコンドリアを通じて、情報を伝達し合えたと思います。私が見た古代人たちは文字や言葉がなくても、一瞬で思いを共有し、正確に情報を伝え合っていました。彼らが高度な文明を築けたのも、一つにはテレパシーのおかげがあったと思います。

しかし食べ物が少なくなると、自分だけが知っている食べ物の情報や隠し場所をほか

の人に知られては困ります。そこで意図的に意識の回線を遮断し、情報の共有を避けたのが、いまの人間たちではないでしょうか。

その代償として、人間は厄介な「自我」を抱え込むことになります。自分さえよければいい、自分を守りたいという「自我」は、損得の世界へと人間を追いやり、お互いに疑い合い、殺し合う殺伐とした世界をまねてしまいました。テレパシーの能力を自ら捨てた人間の代償といえましょう。

テレパシーを失った人間は互いの情報を伝え合うために、言語や文字を発明します。しかし一瞬にしてわかり合えるテレパシーと違って、言葉や文字では思いを伝えきれません。

人間は自分でも御しきれない厄介な「自我」と、思いを伝えきれない孤独の中で、恐怖や不安、ねたみや猜疑心と戦いながら、生きていかなければならなくなったのです。しかし生まれたばかりの赤ちゃんや幼い幼児はまだテレパシーの回線が遮断されていません。「自我」を持っていないのです。この状態だと、さまざまなものと情報共有している可能性があります。

幼児が花や鳥と、会話^{くわくわ}しているように見えたら、それは本当にそうなのかもしれ

ません。「お花が話している」とか「お星さまがしゃべった」などと子どもがいったら、その通りに受け止めてあげるべきなのです。

ところが多くの親たちは「嘘をついちゃいけません」とか「お花が話すわけではないでしょ」などと否定してしまいます。なかには「気味が悪い子だね」とわが子を排除する親もいます。子どもにとって親は絶対ですから、親に気に入られるために自らテレパシーの回線を閉じてしまうでしょう。そして「自我」に目覚めてしまうのです。

なかにはテレパシーの能力を持ったまま大人になった人もいます。私たちはそんな人たちの特殊能力を持った人たちだと思いますが、彼らが特別なわけではありません。私たちがその能力を失ってしまっただけなのです。

私たちが失った代償はあまりに大きかったといわざるを得ません。



私たちは もうすでに未来に行っている！

しかし私たちにも希望がないわけではありません。私たちの本質が肉体ではなく「意

識」だということに気がつけないのです。そうすれば私たちの中で覚醒してくるものがあるはずだ。

肉体ではなく意識だと気づくことをわかりやすく説明しましょう。「木内鶴彦」の本体はここにいる木内鶴彦の顔と体を持った肉体ではありません。肉体とは無関係に「木内鶴彦」が存在していることは、私の臨死体験で明らかです。ですから「木内鶴彦」の本体は肉体にいるのではなく、意識の中にいます。

私たちは肉体の中に意識があると思っていますが、違います。意識と肉体は別々にあるのです。自分意識であることがわかれば、意識は時間や空間を超えていけるので、私たちも容易に時間と空間を超えていくことができます。

そんなことはあり得ない、と思うのは、私たちがいま三次元の世界にいて、その殻の中にがんじがらめに閉じ込められているからです。

でもくり返しますが、私たちは「意識」ですから、たとえ三次元の世界にいても、時間を超えることができます。その証拠をお見せしましょう。

私たちは水を飲もうとコップを取ります。取ろうと思うからコップを取るものであって、取ろうと思わないうちにコップを取ったらおかしいことになります。

つまりコップを取るという動作の一瞬前に意識がそこに飛んでいるから、コップを取る動作ができるわけです。秒数にしたら、一億分の一秒の未来かもしれません。でもその未来に意識が存在しないと、自分の体は動かせないのですから、意識は間違いなく、一億分の一秒未来にあるのです。

私たちが体を動かす前に、必ず意識は一億分の一秒だけ未来に飛んでいます。それを一億分の一秒から少しずつ伸ばしていったらどうなるでしょう。この訓練をしていくと、時間のコントロールができるようになると思います。

これができるようになると、過去にも未来にも行けるので、予知や予言が当たり前にできるようになります。また動物や植物と意思の疎通ができたり、よその国の人の言葉に関係なく会話ができるでしょう。つまりテレパシーの能力が復活できます。

私が中国の病院で臨死状態になったとき、中国の人たちが中国語を話しているのに、日本語と同じように理解できたのも、臨死状態になり、意識が肉体を離れたからです。

いまの私たちは三次元の尺度と一体化してしまっているの、せいぜい一億分の一秒先の未来にしか行けないわけです。でもその思い込みをはずしてやると、もしかしたら五感に続く第六感といわれるところが開けて、過去や未来と往き来できるだけでなく、

さまざまな能力が開花する可能性があります。

たとえばユリ・ゲラーさんは物質（スプーン）を意識によって曲げることができます。私たちが曲げられないのは「曲がらない」と思っているからに過ぎません。脳の中、つまり肉体にとらわれた意識の状態で「曲がらない」という暗示にかかっているから曲がらないのです。

しかし肉体を離れた意識が「これは曲がる」と思えば曲げることができます。物質は三次元の世界のものです。意識は五次元にありますから、三次元のを動かすことなど簡単にできるはず。私たちが三次元にとらわれていて、「できない」と思い込んでいるのに過ぎないのです。

自分を「気配」に変えると

第六感が覚醒する

意識は肉体の外にあるということを確認すること。そしていまは肉体に閉じ込められている意識を肉体の枠からはずす訓練をすること。そうすれば、意識本来の力が発揮で

きます。三次元の世界でいうところの第六感が覚醒するのです。

しかしいうのは簡単ですが、実行するのは容易ではありません。私も臨死の状態ときだけしか、意識を肉体から切り離すことができませんでした。

訓練のヒントになるのが、自分を「無」にすることです。私は一人、真っ暗闇の山中で星の観測をしているとき、よく「空気玉」を見ることがあります。

空気玉とは寒気の塊です。たとえばマイナス一〇度くらいの山中で観測をしているときに、マイナス三〇度くらいの寒気がやってきたとします。寒気は塊になって飛んできますが、ふつうは空気ですから見えません。でも、自分が「無」の状態にあると、空気玉がやってくるのがはっきり見えます。

そこだけ空間の屈折率が変わって、塊のようなゆがみが空中を次々と移動していくのがわかります。それが空気玉です。大きいものから小さいものまで、いろいろな空気玉が空中を飛んでくるのがわかります。

じつは新しい星を発見するのは、こういうときです。うまく表現できないのですが、気配が研ぎ澄まされるのではなく、自分自身が「無」になって、気配と同化してしまう。だから空気玉も見えるわけです。空気や風や空と同化して「無」になってしまったとき

に、第六感が覚醒し、新しい星の存在に気づくのだと思います。

自分を「無」にするというと、座禅を連想する人がいます。でも座禅によってもたらされる「無」の境地は、私がいう「無」とはまったく違うものです。

座禅がいう「無」はたいいていの人の場合、脳の中で考えられた観念的な「無」に過ぎません。「無になろう、無になろう」と脳で命令して、脳の中で意識を「無」にしようとするのが座禅の「無」です。

それでは意識は肉体のおりを出ることができません。そればかりか、逆に脳の中に押し込められてしまうでしょう。

座禅の「無」が、悟りや哲学、倫理などつながっていることも、意識が脳から離れていない証明になります。自分が学んだ精一杯の知識を駆使して、脳の中で考え抜いたことが悟りや哲学になるわけです。

本当の「無」は意識が肉体を離れてしまうので、肉体がそこにあっても、あるという気配がありません。つまり自分が気配そのものになっているため、その人がいるという気配がしないのです。

武芸の達人は、敵が攻めてきても、その人に気づかず、敵が通り過ぎてしまうそうです。気配そのものになってしまいうので、相手が存在に気づかない。まさに最強の達人です。

私も「無」になって、星を観測しているときは、しばしばキツネやタヌキやクマなど山の動物たちがそばにやってきました。警戒心が強い彼らですら、私の存在に気づかない。それくらい気配がなくなっていたわけです。

しかしこの状態にいつでもなれるのかというと、ひじょうに難しいものがあります。私自身も自分が臨死状態になったときと、山で天体観測をしていて、空気玉を見たり、新しい星を見つけたときくらいしか、肉体から意識が離れる「無」の状態を経験したことがありません。

「無」になれば、素晴らしい能力が覚醒することがわかっているのに、なかなかそうなれないのは残念なことです。でも少なくとも、そういう状態になれる可能性は誰にでもあると思っています。

生まれたときは全員が自我のない「無」の状態でしたし、第六感も開いていました。そこに戻ればいい。できないことはないでしょう。肉体にとらわれた意識の状態を少しずつ変えていけば、私たちにも希望はあると思っています。

第五章

私たちの 使命とは何か

● 私たちはゲームの中に 生きるキャラクター

五次元の世界は「膨大な意識体」で満たされていて、無の状態です。そこには何もないので、ある意味とても退屈です。だからひずみが生まれました。そのひずみからできたのが三次元の世界であり、私たち人間です。

暇を持てあました人が退屈をまぎらそうとゲームを始めるように、三次元の世界も五次元の世界にわざとひずみをつくってできあがったといってもいいでしょう。

立花隆さんの一九九六年の著書『証言・臨死体験』（文春文庫）の中でも話をさせていただいたのですが、私は、人間をテレビゲームの中のキャラクターと同じ存在だと思います。

三次元Ⅱ「五次元の世界によってつくられたゲームの世界」だとすると、私たち人間はゲームの中で役割を与えられたキャラクターです。一人ひとりがコンピューターゲームの中のキャラクターとして肉体を与えられ、ゲームの中の人生を生きているのかもしれない。

れません。

そんなばかな、と思うかもしれませんが、三次元の世界から五次元の世界は見えないので、理解ができないだけです。

たとえば私たちがコンピューターゲームをするときを考えてください。三次元に住む私たちが楽しむコンピューターゲームは二次元の世界でできています。

そこではモンスターハンターが日夜凶暴なモンスターたちと死闘をくり広げています。あるハンターは経験値が足りずに、モンスターに踏みつぶされてしまうかもしれません。またあるハンターは一瞬のすきにモンスターに食べられてしまいます。

二次元の世界ではハンターたちがまさに一人ひとりの人生を生き、戦い、死んでいつているわけです。

ハンターたちをコントローラーで操っているのは三次元にいる私たちです。でも二次元の世界で生きるハンターたちに三次元の私たちは見えません。ただもう自分たちの人生を必死に生きているだけです。

それと同じことが五次元と三次元の間で起きているのではないかと思います。すなわち、五次元でプログラミングされたキャラクターが、ある肉体を借りて「木内鶴彦」と

いうキャラクターになり、三次元のゲームの中で人生を生きて死ぬ。

三次元の世界で必死に生きる「木内鶴彦」は、二次元の世界で必死に生きるモンスターハンターと同じです。

ゲームにはさまざまなキャラクターが登場すればするほど面白くなりますから、三次元の世界ではいろいろな能力を持つキャラクターがプログラミングされます。それが三次元の人間の多様性になります。

ゲームの中で登場するキャラクターにはたくさんの試練が与えられます。あえて苦勞が与えられるといってもいいでしょう。この「あえて」というところがポイントです。なぜ「あえて」なのかというと、そのほうがゲームは面白くなるからです。

そしてゲームの中で、キャラクターの能力を最大限引き出してレベルを上げ、課題をクリアしていくのが、ゲームの楽しさになります。ゲームの中のキャラクターにしてみれば、生きる喜びになるわけです。

私たちが五次元の世界のプログラミングによってつくられたゲームの中のキャラクターだとすると、キャラクターとは借りている肉体のことですから、私たちの役割は与えられたキャラクター（＝肉体）の能力を最大限引き出すことになります。

○人間が一番新参者であるわけは……

私たちが生きる三次元の世界は、五次元の世界のひずみから生まれました。その目的は、変化や苦勞を楽しむためです。

三次元というゲームの世界で、いろいろなキャラクターが手を結び合いながら、試練を乗り越え、地球の環境を守っていくためのゲームを行っている。ゲームは難しく、変化に富んでいるほうが面白くなるので、私たちの苦勞や戦いがゲームの面白さになり、キャラクターである私たちにとっては生きる喜びになります。

五次元の世界でプログラミングされたキャラクターは人間だけではありません。当初、地球には単細胞のキャラクターしかありませんでした。しかしそのキャラクターはゲームの中で進化し、複雑で多様な生命が生まれました。

最後に生まれたキャラクターが人間です。なぜ人間が生まれたのかというと、生き物が本能だけで生きていると、バランスがとれなくなってくるからです。そのアンバランス

スを改善できる役割になったのが、本能だけでなく創意工夫ができる人間だったのです。

人間は生き物の中で一番最後に生まれたキャラクターです。つまり一番新参者です。なぜ一番最後に生まれたのかというと、全体のバランスを整えるためです。

いつかは太陽系や地球も終わりを迎える日がくるでしょう。ゲームオーバーの日がやってくる。そのときまで、地球の環境を整えて、この生態系を維持し、楽しく生きられるようにするために、人間というキャラクターがつくられたのです。

つまり私たちの使命は地球の生態系のバランスを整えることにあります。そのために一番最後に生まれてきた新参者なのですから、そのことをよく認識し、先輩の生き物たちのために一生懸命働かなければいけません。

ところが人間は思いついてしまいました。自分たちが一番偉いと勘違いしてしまつた。本当は地球の生態系のために働かなければいけないのに、自分たちの損得だけで動くようになってしまいました。

この社会では二四時間、明かりがすべてなくなる環境はもはや望めなくなつてしまいました。電気による「光害」です。この「光害」により、植物は影響を受けて、見たく

ではわからなくても内側が空洞になり、やがて姿を消していく可能性もあると私は思っています。

いま、私たちの地球は住みやすい環境になっているのでしょうか。人間が使命を忘れ、まるで世界の支配者であるかのようにふるまって生態系のバランスを無視しているために、地球の環境は破壊されています。

いってみれば、「人間」というキャラクターがゲームの中で暴走を始めたのです。

この地球の生態系で一番偉いのは、人間ではなく藻です。二酸化炭素と光合成により酸素をつくった藻がいなければ、生命は生まれませんでした。藻は万物を産んだ神様といつてもいいでしょう。

最初は単細胞の藻から、細胞同士が集まって多細胞の生き物になり、細胞がどんどん集まって、その集大成として生まれたのが人間です。生態系の一番最後に生まれた人間が、一番の新参者、下っばです。私たちが、いま一度自分たちの役割を思い出し、「地球環境を生き物が住みやすい場所に整える」という使命のために、日夜努力し続けなければいけないのです。

しかし人間はその役割を忘れてしまいました。そのツケは必ずやってきます。人間は

つねに試されてきたのですから。

人間は過去三度、 文明崩壊の危機に瀕している

思い上がった人間は過去において三回、文明の破滅を体験しています。ゲームがリセットされているのです。

最初の破滅はいまから一万五〇〇〇年前。月が現れて、地球に大洪水をもたらしたときです。当時、人類は高度な文明を築いていました。その証拠が世界各地の古代遺跡に残された空飛ぶ飛行体の絵です。

彼らはすでにUFOのような空中を浮遊する飛行体をつくりあげていたのだと思います。それらは複雑な機械ではなく、もしかしたら「念」のような意識の力で飛ばすものだったかもしれません。

また、当時の人間はいまの人間よりはるかに身長が高かったと推測されます。まだ地球の質量が軽かった時代ですので、恐竜たちと同じように体が大きくても環境に適応で

きたからです。

実際、私の説を裏付けるように、身長が二メートル五〇センチもあるモンゴロイド系の女性の化石がボリビアやメキシコで発掘されたりしています。

またペルーのクスコの近くにあるサクサイワマンという遺跡はスペイン人によって一五〇〇年頃徹底的に破壊され、地中に埋められてしまいましたが、最近になって、高度な複雑な仕組みの建造物や、宗教施設などの興味深いものが次々と発見されているそうです。

超古代文明はそのほとんどが大洪水のため、海底に沈んでしまいましたが、地上にわずかに残っているサクサイワマンのような遺跡を徹底して調査すれば、かつて栄えた高度な文明や巨人の骨の化石なども発掘されるのではないのでしょうか。

原始時代から始まって、生き物たちと共存しながら、地球環境を整えてきた人類は、文明が高度になるにしたがって、本来の自分の役割を忘れ、自我に走るようになりまし。すなわち人間が一番偉いと錯覚し、欲望のために自然を破壊するようになったのです。

当然、ゲームのキャラクターとしての役割を果たさずに暴走を始めたわけですから、

ゲームは一度リセットされます。最初のリセットは、月となる巨大な彗星が地球を襲い、大洪水が起きたときです。高度な文明は水没し、ほとんどの生き物は壊滅的な被害を受けました。

ヒマラヤクラスの高い山の上に逃げることでできた一部の人間と生き物だけが生き延びることができたのです。私はこのとき地位の高い人間や技術を持った人たちは飛行体に乗って地球上を脱出したのではないかと思います。

彼らは宇宙での生活を送っているうちに、人間とは似ても似つかぬ姿に変化していききました。

たとえば地球より重力が少ない星に移住したとすると、人間の脚はひものように細くても体重を維持することができます。昔の人が描いた、タコのような脚を持つ火星人の絵も、あながちデタラメではないのです。

現在、あちこちで目撃談があるUFOや宇宙人はもしかしたら、いまから一万五〇〇〇年前に地球を脱出した高度な文明を持つ人間たちの末裔かもしれません。そして、UFOに乗って生まれ故郷である地球をそっと見に来ている。そう考えると、宇宙人やUFOにも俄然、親近感が持てる気がします。

● 未確認飛行物体(UFO)は 本当にあるのか？

話は横道にそれますが、UFOの話が出たついでにお話ししておきます。じつは光学レンズを使って自分の目で天体観測をしている人間の間では、UFOが存在することはほぼ常識となっています。なぜなら、宇宙を観測していると、いやでもUFOを目撃してしまうことがあるからです。

じつは私も過去に何度かUFOを目撃しています。それをいままで公にしてこなかったのは、ちまたに溢れるUFO目撃談やオカルト的な話と一緒にされたくないからからです。

ですから、天体観測で子どもたちから質問を受けるときも、「UFOは本当にあるんですか？」という質問には、一応「ありませんよ」と答えています。UFOの存在が科学的に証明できない以上、公にはそう答えるしかありません。

ところがある年、天体観測のイベントの控え室で天文台のスタッフの人たちと雑談を

していたことなのです。

「じつは私、見ちゃったんですよ。UFOを」と私がいうと、台長さんが身を乗り出して、「木内君も見ただの？ 僕も見ただよな」というではありませんか。周りにいた人たちは「私も見ました」「僕も見ました」と次々に告白し始めるのです。

皆、宇宙の専門家たちです。普通の望遠鏡ではおおよびもつかないほど精巧な望遠鏡で、毎日宇宙を見えていますから、見えてはいけないうもの。が見えてしまうこともあります。でもこれをどうやって説明したらいいかわかりません。

へたなことをいうと、自分自身の信頼性を疑われてしまいますから、科学的に証明できないものは、なかったことにして、皆、口を閉ざしてきたのでしょう。科学者としての真剣な悩みを皆が抱えていたのです。

私自身が初めてUFOらしき存在に気がついたのは、航空自衛隊に勤務していた頃でした。あるとき政府機関からの依頼で、夜八時から一〇時までの二時間、日本中の空に飛行機をいっさい飛ばさない時間帯をつくったことがあります。それを一週間続けました。

その間、レーダーは動かして、上空を飛行するものがあれば記録してくれという依頼

だったと思います。すると、飛行機はいっさい飛行していない時間帯のはずなのに、飛行物体に関する情報がたくさん集まるのです。

なかでも私が一番驚いたのは、自分自身が担当したときにレーダーでとらえた未確認物体です。すべての飛行機にはその飛行機がどこの国のどの組織のどの機体かを特定するために識別符号というものがつけられているのですが、その物体には識別符号はありませんでした。

レーダーに米粒のように写ったその物体は出雲あたりから出現し、仙台あたりまで飛行して、レーダーから消えました。

なにより驚いたのはその速度です。ふつう出雲から仙台までだと、飛行機でかなりの速度で飛ばしても四〇分はかかります。

それをたった三分で、その物体は通過していました。速度を計算するとマッハ一五くらいです。当時それだけの速度が出せるジェット戦闘機は地球上に存在していませんでした。

飛行機でないとすると、考えられるのは隕石ですが、もし隕石なら放物線を描いて落下します。しかし私がレーダーでとらえたその物体は地球の表面に対して平行に飛行し

ていました。

これはUFO以外に考えられないと思いますが、証明はできません。私は事実だけを上に報告したのですが、その後、上層部や政府機関がどんな扱いにしたのかは知るよしもありません。

航空自衛隊では、さらにこんなこともありました。あるとき、パイロットのヒアリング調査を実施したことがあったのですが、その中で「空を飛んでいるときに変わったことを見聞きしたら教えてほしい」という質問がありました。

すると、さまざまな証言が寄せられたのです。たとえば五万フィートというかなりの上空を飛んでいるとき、飛行物体の編隊が頭上を飛んでいったとか、目の前を突っ切っ

ていったという証言もありました。

仲間うちでは「けっこうあるね。やっぱりUFOはいるんじゃない」という話になりましたが、こういう話はタブーになっているので、外にはほとんどられません。調査内容はずべて上に送りましたが、その後は私は関与していないので、どういう評価になったのかはわかりません。

日付 1980年 3月17日
時間 20時 00分
シーイング
透明度
赤経 1時 8分
赤緯 +44度 40分
(1950年分点)
光度 9
視直径 2'
備考:

東北

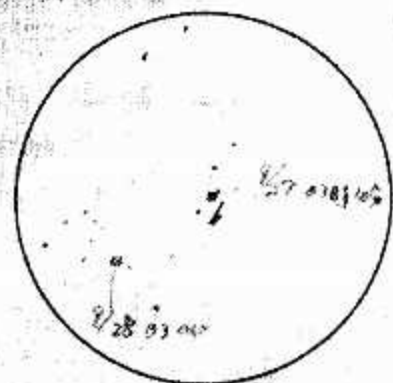
4月15日 本内 中村

スウィフト・タートル彗星の再発見時のスケッチ。

日付 1982年 9月2日
時間 03時 10分
シーイング
透明度
赤経 11時 47分 30
赤緯 +59度 00分
(2000年分点)
光度 12等
視直径 4'
備考:

中央集光なし
移動方向 東

新彗星がスウィフト・タートル



9/28 0300

α 11h 57m 50s

δ +59° 10'

スウィフト・タートル彗星の再発見時のスケッチ。

○ 宇宙のあなたにある 謎の宇宙ステーションを発見？

航空自衛隊をやめ、長野に戻って、本格的に彗星の搜索を始めてからは、何度か実際にUFOを目撃するようになりました。私たちが使う双眼鏡は直線距離で二、三〇キロ先を飛ぶジョット旅客機の窓まで全部見ることができます。ですから、当然肉眼で見えるUFOなら、双眼鏡で見ると、窓の形状や回転運動まではっきりわかります。

私が目撃したのは一九九四年のこと。お釜のような形をしたアダムスキー型でした。真ん中に窓がついていて、底の部分が回転しているのが双眼鏡を通してはっきりとわかりました。

もう一つ目撃したのは、もっと遠くの宇宙にある不思議な光です。あるとき、いつものように山の上で新しい彗星を探しているときに、その光を見つけました。私の望遠鏡で覗くと、はるかかなたの宇宙で、点々と動いていく光があります。

計算してみると、とんでもない距離を一瞬で移動していることになります。動きから

して星でないことは明白です。明らかに人工的につくられた何かだと思うのですが、それが何かはわかりません。

あとで問い合わせてわかったのですが、私が不思議な光を見つけたのと同時刻に長野県の野辺山にある国立天文台でも、一定間隔で送られてくる奇妙な電波をキャッチしていたというのです。

一体、あの光は何だったのでしょうか。私の想像では、おそらく宇宙人の宇宙ステーションのようなものではないでしょうか。今後、標高の高い場所に高性能の電波天文台をどんどんつくるようになれば、私が見た不思議な光の正体も解明されるのではないかと期待しています。

UFOを信じていない人たちは、よく人工衛星をUFOと間違えたのではないかと、という指摘をします。しかし彗星搜索家であれば、そういうミスはおかしません。私たちは地球の周りを周回する人工衛星をすべて把握しています。新しい星を発見するということは、星と間違えやすい人工衛星に関して全部知っていないとできないことだからです。毎晩、いやというほど宇宙を見つめ続けてきた彗星搜索家だからこそ、もし彼らが星ではない何かを見つけたとしたら、未確認の飛行物体である確証は高いのです。

一般の人たちがUFOと間違えるのは飛行機や金星です。飛行機にはライトが三つついていています。ちょうど着陸するとき、飛行機の機体を正面から見ると、ふわふわと左右に揺れているように見えるのです。すると三つのライトがふわふわと動くので「UFOだ！」ということになります。

また金星は明るい光を放つ星なので、多少の雲がかかっているても光が届きます。雲が動くと、金星の光があたかも動いているように見えてしまい、まるでUFOの飛行のように見えるのです。

もしUFOらしきものを目撃したときは、必ず光学鏡を通して見てほしい。それも七倍以上の倍率の双眼鏡や望遠鏡で、しっかり姿勢を固定して（座った姿勢がいいでしょう）覗いてほしいのです。そうすれば、おれずに対象をしっかりと見ることが出来ます。うまくすれば窓の形や回転の有無までわかるでしょう。

そしてもしそれがUFOもしくは見たことがない物体だったら、必ず自分がいる場所と時間を記録しておいてほしいのです。できればそのバックにある星座までわかれば完璧です。そのデータが少なくとも同時刻に三人の人たちから集まると、UFOが出現した位置が特定できます。さらにより多くのデータが集まれば、UFOの軌道やどんな形

状かまで追跡できます。

いま、私は大学院の学生たちと一緒に光学鏡のレンズとカメラを一〇メートル間隔で水平に固定し、空で光る物体に自動的に反応して記録する実験をやるうとしています。そのデータをたくさん集めれば、光る物体の位置や軌道が正確に記録できるわけです。こういう科学的な根拠を示さないかぎり、ただUFOを見たという目撃談だけでは、信用してもらえません。

UFOに関して、あまりに眉唾ものの話が流布しすぎてしまったために、まともにUFO捜索に取り組もうという人が少ないのは、とても残念なことです。

残念といえば、いまは自分の目で星を観察する人があまりに少なくなってしまったことも私としては残念です。どんな高性能のカメラより、人間の目のほうが優秀です。

私が見つけた宇宙人の宇宙ステーションらしい不思議な光も、カメラで写すことは不可能です。光が点々と移動し、すぐに消えてしまうため、露出時間が必要なカメラでは写すことができないからです。

みんなにびっくりされますが、天文学の世界では、写真よりスケッチが優先されます。写真はゴミが写り込んだり、ゴーストが出たりして、星のようなものに見えてしまうこ

とがあります。でもスケッチなら、人間が両方の目でしっかり観察して書いているので、間違いがないという評価なのです。

観察ノートも大事です。いまの若い人は面倒くさがってなんでもパソコンで打って記録してしまいますが、はしょってはいけません。広大な宇宙で、いつ現れるかわからない新しい星を見つけるには、一晩中、空を見あげていなければなりません。人一倍の根気と緻密さが必要です。

山に自動カメラをしかけて自分は家でぬくぬくしていたり、観測ノートやスケッチも書かずに怠けている人にも、新しい星は見つけられないでしょう。

天体観測はあきらめるほどローテクの世界ですが、だからこそ、努力した人がきちんと報われる世界だともいえます。

肥沃な土地が砂漠になり、 二度目の破滅が訪れる

話を元に戻します。人間が過去に三回、破滅したという話の続きです。

最初の破滅は月が引き起こした大洪水により、もたらされました。人間が経験した二度目の破滅はいまから一万二〇〇〇年前頃起きています。

人類は月の出現と大洪水による世界の破滅からようやく立ち直り、ふたたび原始時代のような生活から一步一步文明を築いていました。

高度な文明が栄えていたはずなのに、なぜ原始時代からスタートするのかというと、地球上に残ったのは、そのほとんどが飛行体で脱出できなかった一般庶民だったからです。

さらに知識層が交じっていたとしても、大洪水によりすべての利器を失ったあとでは、彼らの知識を伝達することができなかったからです。

もちろん彼らは高度な文明を一生懸命後世の人々に伝えようとしたでしょうが、それらは年代を経るごとに変質し、やがて神話やオーパーツ（その時代や技術に合わない出土した古代の工芸品などのこと）としてしか残らないことになります。

これは、もし、いま、私たちが乗った船が無人島に漂着し、誰も助けに来ないまま、何世代も経てしまったことを想像すればわかりやすいでしょう。

船には高学歴の技師や知識人が乗っていたとしても、文明の利器が何もない無人島で

は原始的な生活からスタートせざるを得ません。彼らは自分たちの子どもが生まれると、電気やインターネットがあつて、車や飛行機で世界中に移動できる生活について一生懸命教えるでしょう。

でも現実にはその子どもは、電気もなく、火のあかりで原始的に暮らすいまの生活しか知らないわけです。さらにその子ども、そのまた子どもと世代を経ていくにつれ、ますます高度な文明についての伝承は変化していきます。

やがて彼らが子どもたちに伝えた話や残した文字は伝説や神話、古代文字となって残っていくわけです。

いま私たちが目にしているピラミッドなどの遺跡や古代文字も、元をたどれば消滅した超古代文明の生き残りが必死に伝えようとしたものの名残なのかもしれません。

とにかく、そうやっていまから一万五〇〇〇年前に、私たちの文明は一度リセットされました。月が原因の大洪水によって、もう一度原始生活からスタートするのです。

そして三〇〇〇年くらいかけて、ようやく文明らしき形で復活します。やがてそれらは肥沃な大地を耕し、豊かな穀物を栽培するメソポタミア文明へと発展していきます。いまから数千年前のことです。

しかし人間はふたたび自我の欲望を暴走させてしまいます。穀物を栽培し、それらを金儲けの手段に使い始めるのです。人間はどんどん土地を耕し、必要以上に大量の穀物をつくり続けます。肥沃な大地はどんどんやせて砂漠化が進みました。

やがて土地をめぐって、部族同士の争いが生まれました。より多くのテリトリーを独占しようと、人間同士が争ううちに、土地はますますやせて砂漠化し、植物が育たなくなつて、文明は衰退していきます。これが二度目の破滅です。

一度目の大洪水に比べると、破滅の規模としては小さかったのですが、これは文明が育ちきる前に人間の暴走が始まってしまったからです。

○ 三度目の破滅で滅んだ エジプト文明

人間はふたたび原始的な生活を余儀なくされます。そして三度目の破滅はそれから三〇〇〇年後に起こります。このときは宗教的な対立が破滅の引き金を引きました。

宗教は原始的な生活を送っているときに生まれました。人間は村単位の小さな集落で

生活しているとき、太陽や山、岩、巨木などを神とてあがめるようになります。やがてそれらはその地域に暮らす人間の共通の教え、つまり「法」として定着するようになっていきます。

しかしあがめるものは地域によって異なりますが、当然、教えや「法」の違いが対立となつて現れることもあります。これが宗教対立です。

人々は宗教や教えをめぐって殺し合いを始めます。とくに強大な文明を築いていたエジプトでは、ヘブライ人に対する弾圧が熾烈さをきわめていました。ここに現れたのが預言者モーゼです。

彼はエジプトに住むヘブライ人を率いて、エジプトを脱出し、神に示された「約束の地」を目指します。ヘブライ人を追い払ったエジプトは、その後急激に力を失い、しばしば他民族からの侵入や征服を受けることになります。

ついには紀元前三〇〇年頃、アレキサンダー大王に征服され、クレオパトラの死をもつて、事実上のエジプト王国終焉を迎えるのです。

これが宗教対立による文明の破滅の三回目です。いずれも高度に栄えた文明が破滅していく歴史ですが、破滅をくり返すたびに、文明が低下していくのが特徴です。

そして、いま私たちは四回目のゲームセットを目前にしているのかもしれないのです。私たちはあまりに地球を破壊しすぎてしまいました。原子力の利用がその最たるものです。おごりたかぶり、自我に走った人間の運命がどうなるのかは、過去三回の文明の破壊がはっきりと教えてくれています。

◎ 循環型のサイクルを守るのが人間の役割

地球が誕生した当初、この星は放射性物質でおおわれていました。その環境を生命が住みやすいものにするために、さまざまな役割を持った生き物がつくられてきました。一番最初に生まれたのは、放射線を栄養分とする生き物でした。そして放射線がなくなると次に生まれたのが酸素をつくる植物で、その酸素を使ってエネルギーとする動物が生まれ、最後に全体のバランスを整える人間が生まれたのです。

その生態系は循環型のシステムでできあがっています。まず動物や植物が死ぬと腐って微生物に分解されます。それが雨に打たれて、水に溶け、川から海に流れて、最後に

は海の深い海溝に集まります。海溝は地球の生命体の栄養が一番豊富に集まるところです。

その栄養を食べるのが深海魚やプランクトンです。海溝の栄養が深海魚やプランクトンの姿に形を変えて移行するのです。それらを食べるのが海の中層にいる魚たちです。その魚をさらに海面近くにいる魚たちが食べます。こうして海溝の栄養素は魚たちの体に形を変えて、深海から浅い海へと移行してきます。

魚たちの中には回遊して、淡水の川を登り、陸地を遡上して川上で産卵して命を終えるものもいます。これがサケやマスです。

じつは海水に住む魚にとって、海水から淡水に入るのはひじょうに危険なことです。淡水は毒の水の中に入るようなものです。それでも陸地の奥のほうまで、体を傷だらけにして遡上していく魚がいるのは、それが彼らの役割だからです。深い海溝に集まった栄養を自らの体でふたたび陸地に運んでいるのです。

そして産卵を終えて役目をまっとうした魚の死体はキツネやタヌキ、クマなどがくわえて、さらに山の上まで運ばれます。

そこで糞となり、ほかの動物や植物の死骸とともに、微生物に分解され、雨に打たれ

て、川に流れ、海に行く。ふたたび海溝に沈殿した豊富な栄養分は魚の形に姿を変え、海から川を通して山へ、そしてふたたび山から川、海へと見事な循環を形づくりします。

私は山で星を観察していたとき、よくタヌキと出会いました。彼らは必ず山の高いところへえさを持っていき、食べる習性がありました。そこで糞をします。タヌキが糞をする場所はだいたい決まっていて、肥だめのようなものをつくっています。

こうした栄養素が山の高いところから下まで流れてきて、山に木や草が生えるのです。もし山にタヌキやキツネなど動物が住まなくなると、魚をくわえて山のとっぺんまで運ぶものがいなくなります。海溝に集まった豊富な栄養分が山の上から下まで流れなくなります。すると山に木が生えなくなるのです。

その循環を守るのが人間の役割です。山はほうっておいたらやぶになります。やぶの中には動物はあまり入りません。タヌキやキツネなど動物が動きやすいように、そして山のとっぺんまで登って糞ができるよう、人間が山の木を整えてやる必要があります。

もちろん動物たちも本能で山を整えようとしています。イノシシは害獣だといわれますが、イノシシが山の中を歩き回ると、ちょうどいい木と木の間合いがとれます。木の間が詰まりすぎると各々が干渉し合って根腐れを起こしますし、間が開きすぎても、日

が当たって根元が乾いてしまいます。

イノシシは自らの体を用いて、木の間にちょうどいいすき間をつくっているわけです。それだけではありません。イノシシは土の中にいるミミズや根っこを食べるために鼻で地面をほじくり返します。ちょうど土を耕したようになって、土壌に酸素が入り、植物がよく育つのです。

山にいるシカも豆粒のような糞を尻尾でパラパラと地面にまきます。ああやってまるで肥料をまくように山の下草に栄養分をとらせ、下草の成長を促すのです。

しかし本能だけの動物に頼っているだけでは、バランスが崩れることもあります。だから、新しい若い木を育てるために、人間がときどき頃合いを見て、木を切り出してやったり下草を刈ってやったりする必要があります。

そして、切り出した木でつくったのが神社です。いまは木に防腐処置をした朱塗りの神社が多いのですが、昔の神社はみな白木でした。年月が経てば柱や屋根が腐って建て替えなければいけません。定期的に神社を建て替えるために、山を手入れし、木を育て続けなければいけません。それが神社を祭る人間の役割だったわけです。

神社にお供えされる榊さかきはその名残です。榊は、一説によると、神域とこの世の境に生

える木だといわれています。でも私が見てきた過去の時代では違います。

榊は生態系のバランスが上手にとれているという証拠です。山の木がきちんと手入れがされていれば、榊が青々と育ちます。榊はとても繊細な植物で、木と木の間が広すぎて太陽の光が当たり過ぎると葉が焼けてしまいますし、木と木の間が狭すぎると日光が当たらず、貧弱な葉になってしまいます。

ちょうどいい頃合いの立派な榊が育つよう、人間が神様に約束し、「こんな立派な榊をつくっています」とお供えしたのが、榊を祭る始まりでした。要するに生態系のバランスがきちんととれていることを証明する証しだったのです。

しかし、いまではそんなことも知る人間はいなくなりました。そもそも私たち自身が自分が生まれてきた使命を自覚しているのでしょうか。

人間が使命を忘れ、おごりたかぶり、横着になってくると、自然環境が壊れてきます。生命の循環のサイクルが乱れ、人間も動物も植物も狂ってきます。それがいまの社会ではないかと思います。

「地球という生命体の創造力を担っているのが人間だ」などという思い違いをした人々でいっぱいなのがいまの社会ではないかと感じます。

● かつて人間は 循環型の社会をつくっていた

人類が誕生したばかりの頃は、まだ皆が初々しい使命感を持っていました。原始時代、文明はまったく発展していませんでしたが、使命感はいまより強かったと思います。古代の人間はその役割にそった進化を遂げてきました。最初は人間たちはバラバラに暮らしていましたが、そのうち集まって村をつくり、農業を中心とした循環型の世界をつくり出していきました。

日本の場合、最初に循環型の「ムラ」をつくったのは「スサ」という人物でした。おそらくこの人が須佐之男命（スサノオノミコト）だったのではないかと思います。いまから三五〇〇年前の日本にいた人間です。

私は過去に戻ったとき、この人の頭の中に入り込み、循環型のシステムについてヒントをもらいました。

「スサ」が生きた時代、日本には農耕型の村が生まれていました。農耕民族は都をつく

り、囲いをつくって、その中で生活を始めました。周囲には山があり、川があり、豊かな自然がありました。彼らはそこで田畑を耕し、山を育て、動物や植物たちと共生しながら、山を育て、見事に循環する生活圏をつくっていたのです。

このシステムを日本中に広げようと奮闘していたのが「スサ」だったわけです。この時代、日本人はすでにいろいろな技術を持っていました。たとえば田畑に炭素棒である炭を打ち込むことによって、空気中の窒素を土中に呼び込むという、いま考えると驚くべき科学的な方法を導入していました。

いまは化学肥料の窒素をまいて作物を育てますが、そんな化学物質で土壌を汚染しなくても、炭を土中に打ち込むという簡単な方法で、容易に窒素が取り込めるわけです。畑に打ち込む炭のつくり方も画期的です。まず石の上に砂を置いて、石ごと高温で熱します。そして穴の中にこの熱く焼けた砂と木を入れて、さらに上から焼けた砂をかぶせて、密閉した状態で木を蒸し焼きにします。これが質のいい炭になります。

その炭を積み重ねてふたたび焼いていくと、ひじょうな高温になります。そこに砂鉄を流し込んで、鉄をつくったのが「たたら」の文化です。それらは島根県周辺にまだ残っています。とにかくいまから三五〇〇年も前の日本で、すでもう鉄を使う「たたら」

の文化が生まれていたのです。

そうやって、自然と共生しながら、日本人の祖先たちは地球の生態系のバランスをとる営みを続けていました。

しかし当時日本には狩猟型の民族もいました。狩猟民族は食べ物がなくなると、農耕民族を襲いました。日本人はなんとか彼らと折り合いをつけ、一緒に生活できるように工夫しました。狩猟民族には動物を飼育してもらうなどの役割をになってもらったのです。

そして日本でも世界のあちこちでも、村や都をつくって集団で生活する循環型の社会が成立していきました。ところが時代が変わってくると、都を乗っ取ろうとする争いが生まれました。都同士の戦争も始まり、さらにこれに自我の現れが加わってきます。

そのあたりから本来の使命がだんだんに忘れられていきました。そのくり返しが顕著になっていって、近年では宗教戦争や民族戦争、さらには経済戦争へと形を変えていったのです。

いまの社会は完全に一部の人間に牛耳られた、損得だけの世界になっています。もともと人間は自然とともに暮らし、地球の生態系のバランスをとるといふ使命のために生

まれてきたのに、その目的を見失ってしまい、目先の損得や物質的な豊かを追い求めるようになってしまいました。その結果、どこまでいっても満たされない、不安と恐怖と猜疑心でいっぱいの人間に成り果ててしまいました。

○ 世の中に いない人など一人もない

私たちは私たちが生まれてきた本来の目的、使命に立ち返るべきだと私は思います。くり返しますが、私たちの使命は地球の生態系のバランスを調整することです。そのために生まれてきたのですから、一人ひとりにそのための役割があるはずです。

たとえば植物を育てるのが上手な人、絵を描くのが得意な人、音楽を奏でるのがうまい人など、それらはみな固有の役割です。この地球の環境で誕生した生き物の人間という種類の中で、「木内鶴彦」というキャラクターの役割があるのです。

それらは地球環境を維持するために絶対必要な役割です。誰一人として、不必要な人などいません。すべての人間が一人ひとり違っているのは、全員が違う役割を持って地

球のバランスを支えているからです。

しかしいまの産業構造では、一人ひとりが均質化、同質化することが求められます。マニュアルがつくられ、誰がやっても同じサービス、同じ品質、同じ内容の物を提供することが求められます。

一人ひとりが自分が持つ本来の使命にしたがえなくなり、会社や経済の都合に合わせて役割を押しつけられています。それは苦痛以外の何ものでもありません。もし、あなたが仕事をしていて、その仕事に大変なストレスを感じているなら、本来の自分の使命に合っていないことをしているからです。断っておきますが、忙しいと感じるのと、ストレスを感じるのとは違います。

たとえばお店で接客業をしている人が、毎日残業で大変でも、やりがいをもって生きと働いているのなら、その人の役割に合っているといえます。一方でたくさんお金をもらっていても、働いているのはお金のためだけだと割り切っているとしたら、その仕事はその人の役割ではありません。

人は「お金のため」「名誉のため」「社会的地位のため」に生まれてきたわけではありません。もっといえば「生活するため」「家族を養うため」に生まれてきたのではありません。

せん。私たちは地球環境のバランスを保つために生まれてきたのです。

誰もがそのための役割や能力を絶対に持っているはずで、生れなければ、生まれてこなかったでしょう。たとえ極悪非道な犯罪者であっても、生まれてすぐ死んでしまった赤ちゃんでも、必ず役割があります。この世に不必要な人などいません。一人ひとりが皆違っていて、皆違う役割を担っているのです。

もし「自殺したい」と誰かがいったら、私は「やめてください」と必死で止めるでしょう。なぜなら、その人の役割を果たす人はその人以外、どこにもいないからです。地球環境のバランスを保つために、あなたはあなた固有の役割を担っている。だからどうしても死にたいのなら、自分の役割を果たしてからにしてほしいと思います。

体をつくっている細胞を考えてください。人間の体は何十兆という細胞の集まりですが、どの細胞にも役割があります。私たち一人ひとり地球という生命体の一つの細胞だと思えばわかりやすいでしょう。

自分の役割は何かといえ、それを探すのは自分しかありません。自分で見つけるしかないのです。何をしているとき、自分は楽しいのか。何をしているとき、時間を忘れて没頭できるのか。そして何をしているとき、見返りはいららないと思うのか。

この「見返りはいらない」という気持ちが大事です。それこそが本当の役割だからです。音楽が得意な人が音楽を奏でて人を癒してあげられたとき、相手に対して「音楽を聴いたんだから、金を寄こせ」というのでしょうか。

強制されていやいややっている仕事だから、「お金をもらわなきゃ、やってられない」と思うのであって、自分が得意なことを人に提供しているときは、喜んでもらえたことが純粹にうれしい。私も宇宙や天体観測について子どもたちに教えたり、講演したりするときに、見返りを求めようとは思わないものです。

○ 自分の役割を見つめる近道と 一人一品持ち寄りシステム

自分の役割を見つめるためには、自分をほめることが大切だと思います。私たちは小さい頃から、あまりに強制され、無理やり型にはめられることに慣れすぎてきました。自分の本来の役割や自分が本当にやりたかったことがわからなくなっています。

だから自分で自分をほめてあげてください。愛ある言葉を自分自身に与えるのです。

すると愛の波動に細胞の中の意識、ミトコンドリアが反応します。愛とはバランス、ハーモニーですから、愛の波動を受けることで、地球のバランスをとるために生まれてきた自分の使命に無意識に気がつくでしょう。

「そういえば、自分は絵を描いているときに一番楽しかったな」とか「なんだか農業をやってみたくなった」、そんな気持ち大切にしていってほしいと思います。

「意識」は、借りた肉体の能力を引き出す使命があるのです。最初は誰もほめてくれないので、自分で自分をほめる。そのうち能力が活性化されてくると、人がほめてくれるようになります。そうすれば、死ぬときも後悔が残りません。「楽しかったな」という思い出を胸いっぱいにして、「意識」は肉体を離れることができます。

私自身の使命はといいますと、先ほども述べましたように、地球の環境を守るために社会に働きかけていくことだと思います。

一度ならず、二度、三度と死にかけたのに、死なせてもらえないのは、まだ使命を果たしてない。この世に役割が残っているからでしょう。そこでいま、私はこの地球上で循環型の仕組みができないかどうか考えています。「セカンドステージ」を通じてその仕組みを提唱し、各々の社会で理解し、広めていってもらおうというものです。

たとえばお米づくりが得意な人はお米をつくって、みんなにわけ与える。野菜づくりがうまい人は野菜を持ち寄って、みんなに配る。医療の知識がある人は、その知識で人を治す。歌がうまい人は、歌を歌って、人々の心をなぐさめる。

それぞれが「人にあげる」ことで、お金がなくても必要なものが手に入ります。循環型の仕組みが生まれるのではないのでしょうか。

「そんなこと、木内さん、できるの?」といわれますが、できるかできないかではなく、やってみることが大事です。そうしなければ、未来への道は開けません。

私が臨死体験時に見てきた技術や事物をアイデアとして該当者に提供すること、それも私の使命だと思います。一人ひとりが世の中の役に立つ、地球の環境づくりに貢献するという使命感に燃えて自分の得意分野を提供する。それが私の願いです。

○新しい村づくりの構想とは……

昔といまを単純に比べて、いまのほうが恵まれていると考えるのは間違っています。

なぜならいまの生活がたとえ昔より便利であっても、それを維持できる保証などどこにもないからです。

いまの時代は通貨という抽象的な概念が世の中を支配しています。そのシステムがひっくり返ったら、私たちの生活は一体どうなるでしょう。

突然、会社がつぶれてお給料をもらえなくなったら、路頭に迷う人がたくさんいるのではありませんか。

あるいは経済的な混乱が起きて、ハイパーインフレーションに襲われたら、どうやって生活していけますか？ 現に南米のある国では、食パン一斤を買うのに、リュックサック一杯の紙幣が必要だった時代もあります。

私たちが生きるために本当に必要なのは食べ物です。自分の食べる物ぐらいを自分でつくれる人がどれだけいるでしょうか。農家なら世の中の仕組みが変わっても、とりあえず自分がつくった作物を食べて生きていくことはできます。

ところが、その農業もいまは通貨という損得の価値観に毒されています。農作物を出荷する目的でつくっていて、出荷価格を調整するために、自分たちがつくった農作物をわざわざ廃棄するというような人さえいます。そして出荷して得た収益で何をするのか

というと、スーパーに行って野菜を買うのです。

おかしいと思いませんか。どうせ農業をやるのなら、体にいい作物をつくり、自分が食べる分はとっておいて、残りは皆に食べてもらう。ある人はお米をつくり、ある人は大根をつくり、ある人は果物をつくる。それぞれがそれぞれをつくっている人にあげていけば、「あげる↓あげる↓あげる」のぐるぐる回る循環が生まれます。

私はそういう村構想を立ち上げたいと考えています。あちこちに、村単位で循環型の組織が生まれていく。それが地球全体に広がっていけば、循環型の社会がきちんと広がっていくと思います。

「村」というと昔ながらの村落を想像されるかもしれませんが、私は団地やマンションも立派な一つの「村」だと思っています。団地の中で水耕栽培をして農作物を育てればいい。そのときのエネルギーは太陽光を使った発電が便利だと思います。

町内会や商店街を「村」にしてもいいでしょう。そして地域でつぶれかけている町工場などを借りてそこでハウス栽培を始めるのはどうでしょうか。植物は二酸化炭素を吸収して酸素を放出します。つまりは町工場が地球の空気清浄機になるわけです。素敵な話だと思いませんか。

また農作物を育てていれば、自分たちの食糧が確保できますから、たとえ株が下がったり、通貨が暴落しても、とりたてて困ることはありません。太陽光でエネルギーを発電し、電気も供給できます。

これこそが、保証された安心な生活であり、進化した文化的な暮らしです。貨幣という抽象的な概念に踊らされ、損得の価値観でがんじがらめになっている古い世界とはそろそろ別れを告げ、次のステージを目指すべきが来ています。

私は「セカンドステージ」を通じて新しい村づくり構想を練り、原案を完成させて、それを皆さんに伝えて行こうと思っています。

中国での臨死体験のとき、私は自分の未来での姿と役割を見してきました。そこには自分ともう一人の人がいて、共通の使命を持ち、それぞれの役割を果たしていました。

私たちは未来型の村で暮らし、新しい仕組みの中で、さまざまな試みを行っていました。

その村では、「男性性」と、「女性性」とが見事に融合していました。

村の長は、「女性性」を代表する人間になり、万物のあるがままを認め、受け止めることでその能力を最大限引き出す象徴として存在していました。そして、「男性性」はそ

れをサポートする役割として存在していました。

これからくる未来の社会では、「女性性」と「男性性」の融合が求められています。

いまの世界がつくり上げた価値観や死生観に引きずられてはいけません。それらは時間を経つにつれ、さらにエゴを深め、生命に上下の差別をつけるようになります。

しかし次の世の中では、まったく違う価値観を習得しなければ、生きていくことはできません。新しい考え方で生きることを広めること、それが死の淵から生還した私に与えられた使命だと思います。

第六章

未来へ。新たによみがえる 臨死体験の記憶

「最良の未来」と「最悪の未来」、 どちらを選択するのか

二二歳のときの最初の臨死体験で、私は未来の自分自身を見ることができました。私が見た未来の一つは、その通りにすでに実現されています。四〇歳になったとき、高野山で開かれた会議で講演している私の姿が、まさに臨死体験で見た私の未来像とぴったりに一致したからです。

しかしもう一つ見た二重写しの不思議な未来像はまだ実現されていません。老人になった私が子どもたちの前で星について話している平和な未来と、もう一つは廃墟の中を私が茫然と歩く不吉な未来です。

なぜ対照的な未来が二重に重なって見えたのかというと、私はこの未来にはまだ選択できる余地があるからではないかと考えています。人間が自分の使命を自覚し、地球の環境を守るために行動するようになれば、平和な世界はまだ続きます。

でも人間の暴走が止まらず、損得だけを追求する強欲な暮らしを続けていくなら、四

度目のゲームセットを迎える日も近いのかもしれない。未来には「最良の未来」と「最悪の未来」がある。それを選択できるのは私たち自身だと思うのです。であるなら、私たちは「最良の未来」がやってくるよう行動しなければなりません。

死の淵まで行って戻されてきた私は、未来を見てきたものの責任として、このことを訴えていく使命があります。「セカンドステージ」を通じて、私はその活動をしっかりとやっていくつもりです。

しかし未来を変えるのは私一人ではありません。みんなの総合的な力が合わさったベクトルの方向が未来を決めていきます。救世主のような人が現れて、その人に従っていればいいというのは単なる怠け者の発想です。試されているのは、皆さん一人ひとりの選択です。一人ひとりの生き方、行動が未来を変えていくのです。

とにかくいまの地球は大変なことになっています。地球の生態系のバランスに配慮する社会構造にはまったくなくなっています。利益だけを目的に山の木を根こそぎ切り倒し、原子力を使って発電しています。結果的に生き物がどんどん住みにくい環境になっていくのに、そのことを誰も止めようとしません。恐ろしいことです。

地球は何十億年もかけて、生き物が住みやすい環境をつくってきました。そのバラン

スについて、私たちはもっと真剣に考えるべきです。最初は放射線性物質で覆われていた地球を、さまざまな生き物が現れて、きれいな地球に変えてきました。そのバランスは絶妙としかいいようがありません。

まず、放射線をえさとする生物が現れ、有害な放射線が除去されました。次に植物が生まれて、二酸化炭素で覆われていた世界に酸素が満ちてきました。つまり二酸化炭素(CO_2)のうち炭素(C)が植物の体の中に取り込まれることで固体となって閉じ込められ、酸素(O_2)だけが空中に残っていくわけです。

植物の体に取り込まれた炭素(C)は、植物が死んだあとは地中に埋もれて石炭となつて、ふたたび二酸化炭素に戻るのを防いでいます。

海では炭素が結晶化して固まったものがメタンハイドレードになっています。それらは海溝深く沈むことで、気化してふたたび二酸化炭素になることを防いでいる。つまりは二酸化炭素を閉じ込めているといってもいいでしょう。

そして人間や動物が出現したのは、植物に適度な二酸化炭素を供給してやるためです。なぜなら酸素の供給者である植物は、二酸化炭素がなければ生きていけないからです。

動物がどうやって植物に二酸化炭素を与えているのかというと、一番大きな手段は呼

吸です。また枯れた植物を分解する微生物も二酸化炭素を出します。さらに人間は火を燃やすことで、二酸化炭素を生み出しています。このように地球は、人間、動物、植物が互いに助け合って、一番いいバランスをとっています。そのバランスを崩すようなことをしているのがほかならぬ、環境を守るためにつくられた人間たちです。

私たちは自分たちの損得のために原子力発電をつくって、放射能汚染をまき散らすようなことをしてはいけません。原子力を推進する人たちは、何十億年もかけてつくってきたこの地球を、また元の放射線だらけの環境に戻すつもりでしょうか。私が見た「最悪の未来」を選択しないためにも、私たちはいまがふんばりどきではないでしょうか。



波動を使う未来の医療

私は中国で体験した二度目の臨死体験で未来の医療を見てきました。そこでは波動を使った医療が行われていました。

人間をMRIのようにドーナツ型の機械に入れて、その人に固有の波動を浴びせします。すると薬を飲んだり、手術をしたりしなくても、健康が取り戻せるのです。

波動とは物が振動することです。すべての物質は振動しています。なぜなら物質を構成する原子の周りをつねに電子が回っているからです。

この振動をX軸Y軸で表すと、一定の周期の波形を示します。これが物質に固有の波動になります。一つの波の長さが波長、高さが振幅です。波長が同じでも波の高さ、つまり振幅が大きければ、それだけエネルギーが高いことになり、振幅が小さければエネルギーが低い状態になります。

振幅がだんだん弱まってくるのは、エネルギーがうまく供給されていないか、病気になるって弱っている状態です。そして振幅が弱まって、最後に波が平らになってしまふときが、死んだときです。ですから病気の人を元気にしようと思ったら、波の振幅を高くしてやるような働きかけをすればいいわけです。

ここで小学校のときの理科の授業であつた、音叉おんきの実験を思い出してください。音叉の一本を叩いて振動させると、最初は大きな振幅で音が出ますが、だんだんに振幅は弱まり、音も小さくなっていきます。そのまま放っておくと、やがて振幅は止まって、音

もしなくなります。

しかし音が弱まってきたときに、同じ振幅の別の音叉を叩いて近づけるとどうなるでしょうか。音が共鳴し合つて、小さくなった振幅がふたたび大きくなります。この現象を共鳴振動といいます。

これを細胞に用いたのが、未来の医療です。細胞も物質ですから、固有の波動を持っています。細胞が弱ってくると、エネルギーが落ちて振幅も弱くなってきます。そこに同じ波形を持つ波動を近づけてやるとどうなるでしょうか。音叉の実験と同じことが起きるのではないのでしょうか。

人には一人ひとりその人のサイズに合わせた固有の波動があります。さらに肝臓をつくっている細胞、心臓をつくっている細胞など臓器によっても固有の波動があります。それらを調べて、悪い箇所と同じ波形の波動を近づけてやればいいのです。すると、音叉のときと同じように、弱った細胞の振幅が高まって、ふたたび活性化してきます。

未来の医療では、体の悪い箇所ごとに焦点を合わせて振動を与えていくしくみになっていました。その人の本来の振幅をあらかじめ機械にインプットしておいて、悪い部位に同じ波動を与えると、振幅が大きくなって、元気になるという仕組みです。

波動による医療のメリットは副作用がないことです。波動を与えて反応するのはあくまで同じ波動を持った細胞だけです。振動している音叉をいくら近づけても、同じ波動を持たないギターや笛やピアノや机がまったく反応しないのと同じです。

これが薬となると、原理がまったく違います。薬は化学反応によって不純物を細胞から追い出し、細胞のエネルギーを高めるしくみになっています。効き目は早いのですが、副作用もあるのが薬のデメリットです。

薬のルーツは食べ物や植物でした。「この病気になったときはこの草を食べるといい」「これを食べていると、この病気にならない」といった経験則が薬のもとだったのです。肝臓が弱ってきたら、ウコンの根を与えたり、怪我をしたらヨモギの葉を煎じて患部にあてたり、元気がなくなってきたらスッポンの生血を飲むなど、昔の人は身の回りにあるさまざまな動植物を利用して、健康を保ってきました。

しかし科学が発達するとともに、動植物に含まれる成分から病気に効くものを抽出して精製する技術が生まれてきました。これが薬です。精製された成分は確かにウコンの根そのものを食べていたときより、肝臓の病気に即効性がありました。

でも精製された成分は肝臓だけでなく、胃や腸などを通過するとき、ほかの細胞にも

影響を与えてしまいます。これが薬の副作用です。ウコンの根そのものを食べていたときに副作用が出なかったのは、ウコンの根に含まれるさまざまな成分が、ほかの細胞に悪影響を及ぼさないよう緩和する働きをしていたからです。

しかし薬として精製するとき、肝臓に効く成分以外はよけいなものとして排除されてしまいました。それらの「よけいな成分」が、じつはほかの細胞に悪さをしない緩和剤として働いていたのです。

ですから、私は化学的に合成された薬というものをあまり信用していません。何かに即効性があるということは、それだけ純度が高いということです。その分、ほかの細胞へダメージが大きい。緩和作用が劣ると考えられるからです。

抗がん剤などはその最たるものです。がんに効いても、ほかの細胞を破壊してしまうのですから、恐ろしいと思います。

波動による医療なら、同じ波動を持つ細胞しか反応しないので副作用もないでしょう。私はいま波動による細胞の活性化について実験を行っています。波動医療が確立するにはあと一〇〇年くらいかかりそうですが、そのために少しでも役立つデータが残せたら、と思っています。



昔の人は すでに波動医療を行っていた!?

波動を使う医療はじつは昔からありました。昔の占星術が波動を用いた医療に近いのです。いまでこそ、占星術はその人の生まれた日時で運勢や未来を予想する占いになってしまいましたが、もともとは高貴な人の医療に使われていたものです。

人は自分が誕生したときの星のエネルギーの影響を強く受けます。というのも、この地球には宇宙のあらゆる方角からさまざまなエネルギーが飛んで来て、細胞に影響を与えるからです。銀河の中心、射手座方向からは強烈なエネルギーがやって来ますし、巨大な質量を持つ太陽のエネルギーもあります。さらに地球のすぐ近くを周回する月のエネルギーも見逃せません。

そのほかさまざまな惑星や天体からエネルギーがこの地球に降り注いでいます。

卵子と精子が受精し、合体したとたん、たった一つの細胞である受精卵は猛烈に分裂を始めます。ものすごい勢いで分裂して体をつくっていく驚異的な成長は、そのとき、

その場所に降り注いでいた星のエネルギー下で行われます。

昔の人は、体が弱ったときは、受精したときと同じ星のエネルギーの場に置けばふたたび元気になると考えました。その環境が、一番細胞が活性化するからです。おそらく何月生まれの人、この時期になると体が活性化して元気になる、というような生体バイオリズムと星との関係が感覚的にわかっていたのでしょう。

そして高貴な人が病気になったときは、受精したときと同じ星のエネルギー下に置くような治療を行ったのだと思われます。

各地の山の上には磐座いわくらと呼ばれる巨大な岩が残っています。いまの人たちはそれが何に使われたのかわからないので、しめ縄を張って、神様のように扱っていますが、私はこの岩は高貴な人の治療に用いたものだと思います。

なぜなら、多くの磐座は岩の表面を凹面鏡の形に磨き上げ、パラボラアンテナのようになっているからです。そしてたいいていエネルギーの強い射手座の方角か、太陽エネルギーが一番受ける南の方角に向けられています。

高貴な人が病気になると、磐座の前のエネルギーが当たってはね返ったエネルギーが注がれるあたりに寝かせたのでしょう。そして星の配列がその人が生まれたときと同じ

位置に来るのを待ちます。

受精して細胞の活動がもっとも盛んだったときの星のエネルギーの状態を再現してやれば、その人にとってもっともいいエネルギーの場合が作り出されて、体が癒されるのでしよう。それが昔の治療法でした。

しかしこの治療法は、たいへんな費用と労力が必要でした。星の観察だけでも何年、何十年もかかったでしょうし、さらにはその計算に基づいて、磐座をつくるのも並大抵のことではありません。

あくまでも王家や国を司る人たちのために行うものでしたので、後世に残っていったのは星と生体のバイオリズムの関係だけだったと思われます。これがいまの星占いになっていったのではないでしょう。

磐座には治療用以外に、暦として用いたものがありました。こちらは凹面鏡の形ではなく、サークルのように並んでいたり、岩に東西南北に切れ目が入っていたりします。その地区でいつ頃種まきをするのがいいのか、この暦を使って計算していたのでしよう。そうした計算をしたり、磐座を設計するのは天文学者の仕事でした。星の影響下で人間のバイオリズムを計算し、もっともエネルギーが高いときに、王様に政治の決断をさ

せるなどのアドバイスをしていたのだと思います。

とくに沖縄地方では、星の動きから、王として生まれてくる人にふさわしいバイオリズムを調べて、逆算していつ頃着床させてほしいというようなことまでアドバイスしたそうです。強い星の下で生まれた王様なら、国を安泰に守っていくことができるからです。その場合、生まれた日ではなく、あくまで受精した日が重要です。受精した瞬間こそが、細胞がもっとも活性化するときだからです。

たかが星、されど星です。人間が星や宇宙から受ける影響は計り知れないものがあります。私が宇宙に魅かれるのも、星が持つ底知れぬ力、エネルギー、面白さに興味を尽きないからだと思います。

○ 彗星が地球にぶつかる日

じつは地球の危機はすぐそこに迫っている可能性があります。なぜなら一〇〇年後に、地球は巨大彗星と衝突するかもしれないからです。

一九九二年、私は一三〇年間行方不明になっていたスウィフト・タットル彗星を再発見しました。この彗星は一八六二年、アメリカのスウィフト・タットルさんという方が見つけたものです。

しかしそれ以降、行方不明になってしまい、二〇世紀に入ってから世界中の天文学者が必死に探していた彗星でした。私はその彗星を再発見した功績により、国際天文連合から火星近くにある小惑星に「K I U C H I」と命名されました。

ちなみに彗星は発見者の名前がつけられるのがルールとして決まっていますが、小惑星は発見してもその人の名前がつくわけではありません。小惑星の名前は、天文学会で認められるような業績のある人が亡くなったとき、その功績をたたえるためにつけられたり、「アマテラス」「かぐや姫」というように歴史上著名な人物の名前がつけられたりします。私のようにまだ生きているのに、小惑星に名前をつけてもらった例は珍しく、ひじょうに光栄なことです。

私がスウィフト・タットル彗星を発見して間もなくのことです。アメリカのスミソニアン天文台から連絡がありました。どうやらこの彗星は二一二六年に地球にぶつかるかもしれないということです。

私はスウィフト・タットル彗星の軌道を計算してみました。

この彗星は、夏の風物詩であるペルセウス流星群の母天体になります。流星群が通り過ぎるのに、だいたい一カ月くらいかかるでしょうか。その中で流星が一番ピークになる日が母天体のスウィフト・タットル彗星が通るときです。

ふつうの計算ではこの彗星は二一二六年の八月五日に地球に最接近することになります。このときの距離は地球と月の間の距離の約六〇倍ですから、かなりの接近ではありませんが、地球に大きな影響を与えるほどではありません。

しかし氷の塊である彗星は、太陽に近づいたとき逆噴射のような形になり、スピードが落ちる傾向があります。計算よりだいたい一〇〜一五日くらいは遅れてしまうのが当たり前といえます。

もしスウィフト・タットル彗星の通過が一〇日遅れたと仮定しましょう。するとこの彗星は二一二六年の八月一四〜一五日あたりに地球軌道からだいたい七万キロのところを通過することになります。

地球と月までの距離が三八万キロですから、かなりの近くを通過するわけです。

それだけではありません。彗星自体の大きさはだいたい直径二〇キロメートルくらい

ですが、太陽から受けた熱量によって、周囲にガス状の塵がふわっと広がって、おたまじやくしの頭のようなものができます。これを「コマ」といいます。コマから尾を引くように塵が広がって、いわゆるほうき星の形に見えるわけです。

このコマの直径がだいたい四〇万キロ。ゆうに地球と月までを包んでしまうくらいの大きさになります。本体が地球から七万キロメートルを通過するとしたら、地球はコマの部分にすっぽりおわれてしまう計算になります。

コマの部分にはものすごくたくさんの塵が集まっています。それらが大気圏全体に一気に降り注ぐとどうなるのか。大気との摩擦によって大変な高熱が生じます。

長崎で雲仙普賢岳が噴火したときに発生した火砕流の温度が六〇〇度から八〇〇度でした。これは人間なら一瞬で骨だけになってしまう温度です。

しかし彗星のコマの部分が地球の大気圏に入ったら、そんな温度ではすみません。おそらく二〇〇〇度くらいの高熱の塵や灰が地上に降り注ぐことになります。彗星が通りすぎるまで二時間くらいはかかりますから、その間じゅう、地球には二〇〇〇度の灼熱の火の玉がシャワーのごとく降り注ぎます。

あらゆる生物は一たまりもなく死に絶えてしまうでしょう。地球という星がなくなる

ことはありませんが、その表面は様相を変えてしまいます。ただもう荒涼たる死の世界が広がっているだけです。

○ 宇宙ステーションは 彗星の軌道をずらすためのもの

これと同じようなことが一九九四年、木星でも起きています。木星にシューメーカー・レヴィ第九彗星と呼ばれる彗星が分裂しながら衝突したのです。彗星の大きさは直径一キロメートルぐらいです。

そんな小さな彗星でも、分裂した最初の一個が木星に衝突したとき、地球と同じくらいの大きさの火の玉があがりました。さらに次々と彗星のかげらが木星と衝突すると、そのたびに木星の表面に大きな波紋が広がり、木星全体が波を打ったのです。私はオーストラリアでその様子を観測しました。

直径がたった一キロしかない彗星でも、これだけの衝撃があるのです。スウィフト・タットル彗星は直径が二〇キロもあります。こんなものが地球とぶつかったら、と考

るだけでぞっとします。

この危機をどうやって回避するのか。そのために一九九四年、日本で国際会議が開かれました。「世界将来世代京都フォーラム」です。彗星が地球と衝突しないようにするために、彗星の軌道をずらすしかありません。

その方法ですが、会議では核兵器を使う方法が検討されました。核兵器については世界的に核の削減が叫ばれており、不要になった核兵器は地中に深い穴を掘って埋めるか、海溝に捨てる案が出ていました。

地中だと掘り返されるリスクがありますが、海溝なら誰も手を出せません。当時は海へ捨てようという意見が主流だったようです。しかし海溝は生態系のすべての栄養素が集まる場所です。山から平野、川、海へと集まってきたさまざまな栄養素が、最後は海溝に集まります。

それを深海魚が食べて、深海魚をほかの魚が食べ、サケなどの回遊魚が川を上って山の獣に食べられたり、鳥が魚を運んだりして、ふたたび、海から川、山へと栄養素の循環が起きているわけです。

その一番大切な海溝を核兵器で汚染させるなど、とんでもないことです。

そこで会議では、廃棄される核兵器をまとめて太陽に打ち込むのがいいのではないかと案が出されました。

太陽はものすごい量の放射線を出しているので、地球にある核兵器を全部まとめて打ち込んで爆発させたところで、太陽自身はもちろん、地球にもまったく影響はありません。ですからスウィフト・タートル彗星がちょうど太陽の裏側に近づいたときをねらって太陽に核兵器を打ち込んでやる。それでも相手は直径二〇キロもある大きな彗星ですから、計算すると二秒角ぐらいしかずれません。

分度器の一度の六〇分の一のさらに六〇分の一が一秒角ですから、二秒角というのは、本当に目にも見えないくらいわずかな角度です。それだけのわずかな角度でも、太陽から地球に来るまでには、かなりの距離がありますから、軌道が相当ずれることになります。

いまのところ、一〇〇年後に訪れる彗星との衝突を避ける希望はそれしかありません。いま、宇宙で宇宙ステーションを建造しているのは、そのためです。宇宙ステーションから地球の環境の観測も行い、彗星が近づいたときは核兵器を曳航^{えいこう}して、彗星の軌道上に設置することも検討されているようです。

新たによみがえる 臨死体験の記憶

私には時期が来なければ、またすべてが揃い整わなければ話すことができない臨死体験の真実がありました。

それは私の意識が私の意思の赴くままに、数多くの時空や次元を彷徨^{さまよ}っているときのことでした。三次元外の意識の宇宙。この五次元宇宙ともいうべき漆黒の世界で、私の意識は一つの波のようになりながら、漂いながら、多くのものを自分の興味があるがまま、感じる旅をしてきました。

「この旅を終え、戻らなければ……」。すると、五次元の意識の宇宙には存在し得ない光が現れました。三次元と五次元の狭間にある境目ともいえない曖昧な場所から放たれるものに、興味をそそられた私はそこに近づいていきました。

そこでは空間に閃光が走り、それはそれは美しい世界でした。

そして、旅する私の意識はある音を耳にします。その調べはとても美しく、独特のメ

オーロラは太陽から吹きつける太陽風が大気中の原子や電子と衝突したことで起きる発光現象。莫大な電気エネルギーを発生させるが、それらを有効に取り出す方法はまだ開発されていない。

ロデイで私の細胞の一つひとつに何かについての懐かしさを戻してくれました。

またとても大きな音で、宇宙の脈動と重なり、絶妙のバランスで聴こえました。心地いい音は風の声のようでもあり、パンフルートという楽器の奏でる音に、とても似ています。

どれほどの時間が経ったのでしょうか。私の意識はいままで聴こえていたその音に、もう一つの声と同じ調べを歌っていることに気がつきました。私はだんだん小さくなっていく歌声を聴きながら、五次元の宇宙から水素の膜を突き抜け三次元の宇宙へ、そして、遂には、この世を去って三〇分経った自分の体へと戻ってきたのでした。

いま思えば、その音、波動はすべての生命が生み出される原動力となる現象の源だったのだと思います。この声を聴くことができたからこそ、私は臨死体験者としてこの世に生還できたのです。

戻ろうという自分の意思、これさえも、まるで子どものやりたいことを、あたかも自分一人の思いで成し遂げたかのように導く母性の誘いいざなによりできたことなのかもしれない。すべては私にとっては不思議な空間の出来事でした。

臨死体験によって見た多くのことは、その体験直後の私の頭ではまったく整理するこ

とができず、稀有な経験により、これまでの人生の大半を苦しみと消化しきれない混沌とした思いの中で過ごさねばなりませんでした。

また、音の正体を臨死体験後、三〇年以上の長い間知ることがかなわなかったのです。私の臨死体験は夢だったのか、幻だったのか。

しかし、私が五二歳のとき、それは突然、訪れました。最初の臨死体験のときに、私の意識が旅の中で出会ったその声が実体となって、私の前に現れたのです。

それは、はるか遠い過去からともに生きてきた対の意識。その意識は同じ思い出と未来で果たす約束とともに現れたのです。坂上玲子さん、この人の訪れは未来に出会う人を臨死体験時に見たという類のものではなく、彼女が現れたことにより、彼女とともに在った過去も、これからともに歩む未来もすべてが実在していることを意味しました。

同時に、私の見てきたものが、過去と未来の継続の裏付けとともに確認がとれた瞬間でもありました。膨大な意識に吸収される前に「声」と出会うことによって、また、木内鶴彦という個を保つことで、この世に生還することができました。だからこそ、その訪れとともに、過去から引き継がれた私たちの本当の使命を果たさなければならぬ。

そして、以後の私は、そのすべてとともに人生を歩く決意をしたのです。「セカンド

ステージ」は私の人生の集大成でもあります。

私の見てきた未来では、「良い方へ向かう未来」と「悪い方へ向かう未来」とがあり、この「セカンドステージ」という組織の存在は、良い未来への流れに入ったときのみ現れるものだったのです。

歌声を聴きながら三次元の宇宙に戻されたときより、私の使命はこの世の深い苦しみ、この世の深い喜び、人とは、宇宙とは、生きるとは……について私の知り得たすべてをお話することにあります。

そして、「セカンドステージ」を通して、本当の話をすること、死ぬことでしか行けなかった旅で見てきた、すべての真実をお話する時期が来たのだと悟りました。

臨死体験をしたことにより、人にはいえない多くの苦しみを背負い生きてきた私も、本当の私です。しかし、それ以上に私は多くの何かに触れることができました。その何かが果たして何だったのか、すべてを知ることはいまだにできてはいません。

それでも私は私のこの人生を愛おしく思います。あのときの私は星空の下で生きていたかった。でもいまなぜだか私はどんな空の下であっても私らしく生きていける気がしているのです。

おわりに——四度目の破滅は避けられるのか

歴史が進化しているというのは大きな間違いです。

エジプトのピラミッドを見てください。大型重機やコンピュータもないあの時代に、人力だけであれほど巨大で精緻なものがつくれたのは奇跡だと思いませんか？

いま、私たちがあの時代に戻ったら、とてもあんな素晴らしい建造物はつくれないでしょう。でも彼らはつくってしまいました。なぜなら私たちよりはるかに進んだ文明を持っていたからです。

だからピラミッドは奇跡でも何でもありません。それをつくることができる能力や知性を、あの時代の人たちが持っていた証拠です。

しかし人間たちの間で損得の世界が広がり、その考えが日常生活のほとんどを占めていくうちに、人間の心は偏った価値観へと進んでいきました。また、争いのために国土は荒れ、自分たちの生活圏も侵されていきました。

その結果、いま、世界中で生きることさえ困難な状況の人々を、同じ人間がつくりだしてしまうということになったのです。

人間は高度な文明を発達させると、きまって私利私欲と傲慢に走り、自らを破滅させてきました。かつて人間は三度の破滅を体験しています。三度破滅してもまだ懲りないのが愚かな人間です。

いま、地球上に自分たちの本当の使命を自覚している人が果たしてどれだけいるでしょう。

私たちは暴走を始めています。どうすれば自分の得になるかといった損得だけの価値観が社会を支配し、強欲な資本主義が地球環境を破壊しています。その先にあるのは四度目の文明の破滅です。

いまから一〇〇年後には、私が再発見した「スウィフト・タートル彗星」が地球に衝突する危険性をはらみながら近づいてきます。人類は一〇〇年後にはその危機に立ち向かっていなくてはなりません。

どうすれば、この地球の環境を守って行けるのでしょうか。

自然は美しい。恐ろしいほど美しい。

その地球に生きる生命がさらされる危機はとてつもなく多く、我々地球上の生命は時にはその運命に翻弄されながら、それでも各々の種の保存をかけ、力強くたたかに生き残ってきました。

地球に生きるということは厳しいことですが、とても素晴らしい経験なのです。この壮大な生命の営みを、エゴを持った人間が原因で滅ぼしてしまうのはとても悲しく、また恐ろしいことです。

今回は自然の営みの中で消えていくのではなく、まさに人類の手でこのすべてを滅ぼそうとしているのです。

四度目の破滅が避けられるのか。私たちに残された時間はそれほど多くありません。

「私の使命とは何ですか？」

多くの人々は、必ずこの質問にたどり着きます。

その答えはただ一つ。

「四度目の破滅を回避すること」

人間の体を借りて生きている生物の、反省と修整の使命にあなたは気づいていますか。

この本を読むことができない地球上のすべての生命体に捧ぐ。

●著者略歴

木内鶴彦 (きうち・つるひこ)

1954年長野県に生まれる。子どもの頃から、星や宇宙の神秘に魅せられ、独自に観測を行うが、小学校5年生のときに観察した池谷・関彗星がきっかけとなり彗星に興味を持つ。その後、航空自衛隊に入隊し、デイスパッチャー（飛行管理）となる。22歳のとき、生死をさまよう病気をきっかけに退官。以後、長野県にて彗星捜索家として観測を続ける一方で、全国で講演会、観望会を行い、天文や環境問題を説いて回っている。2009年、皆既日食観測のため訪れた中国で、吐血・下血して倒れ、1カ月の入院。ふたたび生死をさまよう経験をする。'10年より活動を再開し、現在に至る。

彗星発見に関しては、1990年3月16日、チェルニス・木内・中村彗星発見。同年7月16日、土屋・木内彗星発見。'91年1月7日、メトカーフ・ブルーイントン彗星を再発見。'92年9月27日スウィット・タットル彗星を再発見する。'93年9月、国際天文連合よりスウィット・タットル彗星発見の業績を認められ、小惑星に「KIUCHI」と命名される。

- ・木内鶴彦オフィシャルサイト <http://kiuchitsuruhiko2stage.com/>
- ・問い合わせ先 TEL 070-6685-1236 E-mail hp-direct@willcom.com

「臨死体験」が教えてくれた宇宙の仕組み

2014年6月6日 初版第1刷発行

著者 木内鶴彦
© Tsuruhiko Kiuchi, Printed in Japan, 2014
発行人 山中進
発行所 株式会社 晋遊舎
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-12
電話 03-3518-4071 (編集部)
電話 03-3518-6861 (営業部)
<http://www.shinyusha.co.jp>
印刷・製本所 共同印刷株式会社
DTP製作 伏田光宏 (F's factory)
ISBN978-4-86391-990-7 C0095

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本がございましたら、

購入店を明記の上、弊社営業部宛てにお送りください。

送料弊社負担にてお取り替えいたします。

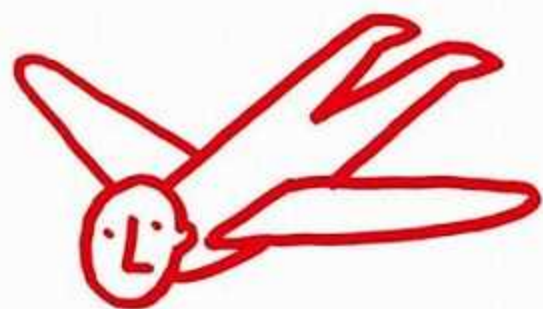
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製複写（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作権及び出版権の侵害になりますので、その場合はあらかじめ小社あてに許諾を求めてください。

木内鶴彦 (きうち・つるひこ)

1954年長野県に生まれる。子どもの頃から、星や宇宙の神秘に魅せられ、独自に観測を行うが、小学校5年生のときに観察した池谷・関彗星がきっかけとなり彗星に興味を持つ。その後、航空自衛隊に入隊し、ディスプレイャー(飛行管理)となる。22歳のとき、生死をさまよう病気をきっかけに退官。以後、長野県にて彗星搜索家として観測を続ける一方で、全国で講演会、観望会を行い、天文や環境問題を説いて回っている。2009年、皆既日食観測のため訪れた中国で、吐血・下血して倒れ、1カ月の入院。ふたたび生死をさまよう経験をする。'10年より活動を再開し、現在に至る。彗星発見に関しては、1990年3月16日、チェルニス・木内・中村彗星発見。同年7月16日、上屋・木内彗星発見。'91年1月7日、メカーフ・ブルーイントン彗星を再発見。'92年9月27日スウィット・タートル彗星を再発見する。'93年9月、国際天文連合よりスウィット・タートル彗星発見の業績を認められ、小惑星に「KIUCHI」と命名される。

あの世飛行士

未来への心躍るデスサーフィン



木内鶴彦 × 保江邦夫

立花隆
『証言・臨死体験』で
おなじみ

木内鶴彦の臨死体験世界を

物理学者

保江邦夫がその威信にかけて徹底検証!

その驚くべき「超」結論は?

東京神楽坂ヒカルランドパークで大好評を博した
白熱セッションがそのまま本になった!

矢作直樹 × 神原康弥

日本の靈性を上げる ために必要なこと

徳間書店

木内鶴彦×中丸薫

地球の大そうじは《今ここ日本》から《このテクノロジー》で！

らくらく5次元ライフ の はじまり はじまり

〔太陽光集光式発電システム〕



原発も火力発電所も要らない

〔太陽光利用炭素化装置〕



ゴミ消滅+5年もつ電池を全家電製品に組み込み

家庭から奥様方からエネルギー革命

国際特許内容をまるまる公開！



あの世飛行士^{タイム ジャンパー}は見た!?

歴史の有名な あの場面

あまりに不都合な

《歴史トラブル》へのタイムトラベル



臨死体験で見てきた話

木内鶴彦

神様から聞かされた話

長典男



ホントだったら超タイヘン!?

こんなことを語れるのはこの2人以外にありません!!